

# ラーダの中国行をめぐる

## — 菲律賓諸島筋記 (1) —

中 砂 明 徳

はじめに

置き土産として残していった『イエズス会中国布教史料集』第1巻<sup>1</sup>の序言で、イエズス会士 Joseph S. Sebes<sup>2</sup>はこの新しい史料集編纂への意気込みを語り、原史料（イタリア語、ラテン語、ポルトガル語、スペイン語）に英訳を付けることを予告していた<sup>3</sup>。それは、4つの言葉しかも16世紀のそれを扱えるオリエンタリストの数が多くないことに配慮したからだが、逆に英訳しか提示しない刊行物として、ハクルート協会叢書を挙げている。むろん、このシリーズに収録される西洋人の旅行記録には有名なものが多く、往々にしてすでに原文が刊行されていることを付言し忘れてはいないが、近代以降は未刊のものがいきなり英訳で出た例もあるとして、組上にあげられたのが Charles R.Boxer の『16世紀の南中国』<sup>4</sup>である（以下、『南中国』とする）。

本書の中でまず紹介される Galeota Pereira の記録（来日前のルイス・フロイスが1561年にゴアからヨーロッパに送付）の英訳は基本的には Richard Willis の『東西イ

<sup>1</sup> John W. Witek and Joseph S. Sebes eds., *Monumenta Sinica I (1546-1562)*, Rome : Institutum Historica Societatis Iesu, 2002. 共編者のウィテク (1933-2010) も鬼籍に入り、続巻は出ていない。

<sup>2</sup> 1916-1990. 代表作は *The Jesuits and the Sino-Russian Treaty of Nerchinsk (1689): the diary of Thomas Pereira*, S. J., Rome : Institutum Historicum Societatis Iesu, 1961.

<sup>3</sup> イエズス会の布教史料集は、簡条書きの要約を編者の使用言語（当初はラテン語、のちには各国語が使われるようになるが、英語は稀）で示した後に、原文提示が行われる。イエズス会の布教史料集シリーズの使用言語の性格については、拙稿「イエズス会の極東関係史料—「大発見の時代」とその後」（大澤顯浩編『東アジア書誌学への招待』第2巻、東方書店、2011、pp.195-229）参照。

<sup>4</sup> *South China in the Sixteenth Century : Being the narratives of Galeote Pereira, Fr. Gaspar da Cruz, O.P. and Fr. Martin de Rada, O.E.S.A., 1550-1575*, London : Hakluyt Society, 1953. 中国語訳『十六世紀中国南部行紀』（中華書局、北京、1990）がある。

ンド旅行記集成』<sup>5</sup>に依拠しているが、ウィリスは1565年にベネチアで刊行されたイタリア語版『イエズス会神父のインド新報告』<sup>6</sup>から英訳している。そして、このイタリア語版は表題が示すようにスペイン語から翻訳されたものであり、著者ペレイラ自身はポルトガル語で記録を著している。つまり、ボクサー著に載る英訳は葡→西→伊語とリレーされた結果なのである。

Gaspar da Cruz<sup>7</sup>の記録については、ボクサーはポルトガル語版（1569/70年刊）を英訳したSamuel Purchasの旅行記集成（1625年刊）を底本にしている。ボクサーはこの2作のいずれにおいても原著と校合したうえで、翻訳で抜け落ちた部分（パーチャスの場合はテキストのほぼ3分の1に達する）を補ったとしており、前者については同時期にイエズス会の研究誌にオリジナルの文章を載せてもいる<sup>8</sup>。しかし、イエズス会の研究誌は布教史に直接的な関心を持たないオリエンタリストには縁遠い媒体である。

そして、3番目がアウグスティノ会士Martín de Radaの中国使節行の記録である。抛るべき英訳がなかったので、ボクサーが入手した各種テキストに拠ってスペイン語から翻訳したものである。訳出の底本には、17世紀末に刊行されたガスパール・デ・サン・アグスティンの『フィリピン諸島征服記』に収録されたもの（旅行記部分のみ）と、ボクサー所蔵の16世紀末の写本<sup>9</sup>の中にあったもの（中国事物志のみ）を使い、

<sup>5</sup> *History of Trauayle in the West and East Indies and other countreys lying eyther way towards fruitfull and ryche Moluccas*, London, 1577.

<sup>6</sup> *Nuovi avisi delle Indie di Portogallo, venuti nuovamente dalli R.Padri della compagnia di Giesu, e tradotti della lingua Spagnola nella Italiana, Quarta parte.*

<sup>7</sup> 日埜博司訳『十六世紀華南事物誌』（明石書店、1987）改訳版『クルス『中国誌』』（講談社学術文庫、2002）がある。前者には付録としてペレイラの記録が次注のボクサー翻刻のテキストに基づいて訳出されている。

<sup>8</sup> “A Portuguese account of South China,” in *Archivum Historicum Societatis Iesu*, vol.22,1953, pp.57-92. ちなみに、この巻はザビエル没後400周年の記念号であり、史料が紹介されたのは、ペレイラがザビエルと交流を持っていたからである。

<sup>9</sup> 彼が1947年にオークションで購入したもの。種々の文書から成るが、言及されるもっとも遅い時期は1590年。ff.231-239の“Relation de las cosas de Chine que propriamente se llaman taybin”がラーダの記録である。Boxer, “A late sixteenth century Manila manuscript,” in *Journal of the Royal Asiatic Society*, 1950-1/2, pp.37-49. なお、Introduction (p.lxxviii) では、アウグスティノ会誌版に触れるだけで、マニラ写本には言及しないために、前者が翻訳の底本であるように見えるが、本文の前の表題 (p.241) によって後者が底本であることがろうじて分かる。2つ

パリ国立図書館所蔵のラーダ関係文書の中にあるもの<sup>10</sup>（旅行記と中国事物志の双方を備えていて、アウグスティノ会の研究誌に移録されていた<sup>11</sup>。以下、「パリ本」とする）を参照している。しかし、サン・アグスティンは当時すでに稀覯書となっており<sup>12</sup>、これに加えて個人蔵の写本とくれば、アクセスが難しく<sup>13</sup>、一般読者が翻訳をチェックしようと思ってもまず無理である。

ボクサーはハクルート協会叢書の方針に従って仕事をしたのだから責められるわけではないのだが、彼の校合の跡を読者が追える道具立てが提供されていないのは確かである。セベスがこのことに拘ったのは、英語優勢の状況を踏まえ英文全訳を提供し、多くの読者がテキストにアクセスできるようにすると同時に<sup>14</sup>、原文と訳文を読者が比較できるようにするためである<sup>15</sup>。結局それは実現しなかったが、テキストを読者により開かれたものにしてしようとする企図自体は意味がある。いったん権威の手によって紹介されたテキストそれも英語のそれはそのまま固定して、誰もその源までさかのぼってみようとしなくなるのが往々にしてある。ラーダのテキストの場合は、それが組み込まれたとされるメンドーサの『チナ大王国誌』にまで影響が及ぶ。現に、その日本語訳に注をつけた矢沢利彦は『南中国』を大いに利用しているのである<sup>16</sup>。

---

の部分兼ね備えるアウグスティノ会誌版を翻訳の底本に使わなかった理由を憶測すれば、他の2テキストが手元にあったのに対し、パリの写本を見ていなかったことにあるのだろう。

<sup>10</sup> Codex Espagnol 325, ff.16r-31v. 現在は図書館のサイト Gallica で文書を閲覧できる。なお、パリ本には使節行の前提となった大陸との初期交渉史の部分があるが、ボクサーは旅行記の部分にサン・アグスティンと同一視して、そこだけを翻訳しているために、前段の部分は一般には知られていない。

<sup>11</sup> *Revista Augustiniana*, vol.8 and 9, 1884-1885.

<sup>12</sup> この時点で、後述するメリーノの校訂本は出ていない。

<sup>13</sup> 現在では、彼の関係資料を収めるインディアナ大学のデジタル・ライブラリーで閲覧可能である。http://webapp1.dlib.indiana.edu/metsnav3/general/index.html#mets=http%3A%2F%2Fpurl.dlib.indiana.edu%2Fiudl%2Fgeneral%2Fmets%2FVAB8326.

<sup>14</sup> セベスはハンガリー生まれだが、1950年にアメリカに渡ってから1984年に中国布教史の修史官としてローマに呼ばれるまで、英語で学術活動を行ってきた。Ricci Roundtable, http://ricci.rt.usfca.edu/biography/view.aspx?biographyID=1334.

<sup>15</sup> 注2著書でも、その方針がとられている (pp.175-303)。

<sup>16</sup> 『シナ大王国誌』（長南実訳、矢沢利彦訳注、岩波書店、1965）。矢沢の「解説」もまた『南中国』の序論に多くを負っている (p.41)。第1部がサン・アグスティンに完全な形で掲載されるとする (p.30) のは、注10で述べたように誤り。また、第2部がRevista版を使用したとするのは、注9で述べたようにボクサーがミスリードする記述をしているからである。

実はボクサーのテキスト操作には手抜きがあるのだが、彼の英訳（ないしその漢訳）しか読まない研究者にはまずそれは気づかれない<sup>17</sup>。

## 1、ボクサーが使ったテキスト

マルティン・デ・ラーダ（1533-1578）<sup>18</sup>が1575年に中国に赴いたのは、フィリピン  
のスペイン政庁の使者として、前年にマニラを襲った海賊林鳳（スペイン語史料では  
主に Limahon と表記される）対策を福建当局と打ち合わせ、さらにこれをきっかけに  
大陸での布教・通交を目指してのものであった。この時の旅行記と、収集した資料を  
もとにして著された中国事物志は、のちにやはりアウグスティノ会士であるゴンザレ  
ス・デ・メンドーサの『チナ大王国志』<sup>19</sup>に利用されたことで知られている。スペイン

<sup>17</sup> 本稿に関連する史料集 Emma Blair and James A. Robertson, *The Philippine Islands, 1493-1898*, 55vols, Cleveland: The Arthur H. Clark Company, 1903-1907 もまた、一部例外はあるが、基本的には英訳しか示さない。このシリーズはスペイン語使用者を除く研究者にきわめて重宝されてきたが、その史料選択・翻訳の検証はほとんどなされていない。Glòria Cano, “Blair and Robertson’s *The Philippine Islands, 1493-1898*: scholarship or imperialist propaganda,” in *Philippine Studies*, 56-1, 2008, pp.3-46, id., “Evidence for the deliberate distortion of the Spanish Philippine colonial historical record in the Philippine Islands 1493-1898,” in *Journal of Southeast Asian studies*, 39-1, pp.1-30 の両論は、その史料選択・訳語の選定において編者がスペイン統治期の「暗黒」をことさらに浮かび上がらせ、アメリカの植民統治の正当化を図ったと批判する。しかし、検討が史料集全体に及んでおらず、その主張の妥当性もこれだけでは判断しにくい。確実に言えるのは、本史料集があしかけ5年という短時日で全55巻が出版されたために（十分な準備期間があったわけでもない）、その編集には草卒の感が否めないということである。彼らがそれまでのスペイン人学者による史料紹介・研究の蓄積をどのように評価してそれを生かし、さらにこの史料集で何を革新しようとするのかを示す序論を欠く（そのかわりに、権威づけのためであろうが、イェール大学教授 Edward G. Bourne の長文序論が置かれるが、スペイン統治期の概説であって、本史料集の性格を予告するものとはなっていない）。各巻の初めにかぶせられる序文も、とりあげる史料をつないだ歴史概説として便利なものだが、数ある史料の中でなぜそれを選んで取り上げたのかを示すことはない。

<sup>18</sup> 彼の伝記はいくつかあるが、近年のものとして、Maria Isabel Ostolaza Elizondo, “Fray Martin de Rada, evangelizador, cosmógrafo y embajador en China,” in *Huarte de San Juan. Geografía e Historia*, 13, pp.177-198, 2006 を挙げておく。中国行のテキストには言及されるが、足跡をたどる史料として使うに過ぎない。

<sup>19</sup> 漢語訳の門多薩『中華大帝国志』は2種類刊行されている（何高濟訳、中華書局、1998。孫家堃訳、中央編訳出版社、2009。前者は19世紀に翻刻された英訳からの重訳、ただし訳者前言によれば、張鎧が原版をつかって部分的に校正を行ったという。張鎧は大陸における数少ない

語圏では、太平洋帰航路を開拓した同僚アンドレス・デ・ウルダネタとともに、ラーダの学者、事物探究の徒としての側面にも注意が払われているが<sup>20</sup>、その認知度のかなりの部分は当時の中国について記録を残したことに負っていると言ってよい。

では、ラーダのテキストをボクサーはどのように扱っているのだろうか。彼は序説 (Introduction) の中で、ラーダの記録を構成する2つの部分がメンドーサやヘロニモ・ロマンの『世界の諸共和国』(1595刊)<sup>21</sup>によって利用されたこと、旅行記の部分はサン・アグスティンの『フィリピン諸島征服記』(1698年刊)にまるごと収録され、しかもそれは「ラーダの自筆文書に忠実に従ったものである」との著者の言を引く。さらに、19世紀にラーダの記録を載せた前述のアウグスティノ会誌の編集者は、旅行記の部分がすでにサン・アグスティンにより2世紀も前に公にされていることを知らなかった(かあるいは単に述べていないだけか)としている (p.lxxviii)。また、アウグスティノ会誌版とサン・アグスティンを照合したところ、同一の原本から出ていることが明らかだと言う (p.lxxix)。しかし、後述するように、両バージョンは末尾の部分で著しく異なっているのに、ボクサーはそれを見逃したか、指摘し忘れている(比較していれば、

---

スペイン語使用研究者で中西関係史について数冊の著作がある。後者は未見だが、孫氏もスペイン語を使用しており、おそらく原著から翻訳したものであろう)。

<sup>20</sup> ラーダの科学者としての側面に注目した近著に、José Antonio Cervera, *Tras el sueño de China: Agustinos y dominicos en Asia Oriental a finales del siglo XVI*, México : Plaza y Valdés, 2013 がある (pp.136-203)。

<sup>21</sup> 初刊は1575年。著者はやはりアウグスティノ会士である。95年の増補版にラーダの記録が収録された。本書の性格については、Joan-Pau Rubiés, “The early Spanish contribution to ethnology of Asia in the 16<sup>th</sup> and 17<sup>th</sup> centuries,” in *Renaissance Studies*, 17-3, Oxford, 2003, pp.429-430 (のちに同氏の論文集 *Travellers and Cosmographers: Studies in the History of Early Modern Travel and Ethnology*, Aldershot : Ashgate Variorum, 2007 に収録), id., “The concept of gentile civilization in missionary discourse: Mexico, Peru, and China in the *República del Mundo* by Jerónimo Román (1575-1595),” in Ch. de Castelneau-L'Estoile et al eds., *Missions d'évangélisation et circulation des saviors (XVI<sup>e</sup>-XVIII<sup>e</sup> siècle)*, Madrid : Caza de Velázquez, 2011, pp.311-350 を参照。ルビエスが前者で「ロマンよりも前(10年前)にメンドーサがラーダの記録を刊行したのには、ラーダも唱えた中国征服論を支持する一派と平和外交路線の一派の対立が背景にある。メンドーサの著作は中国のプラスイメージを演出していることから、ローマ教皇、そしてフェリペ2世の支持を得た。つまり、ラーダの記録の解釈の如何が先取権をメンドーサに与えた」と推論するが、根拠は示されていない。ロマンがメンドーサの先取に複雑な気持ちを抱いていたことは95年版の序言に見えるあてこすり(『南中国』p.lxxxii)から明らかだが、その背後に中国征服をめぐる意見の対立を見るのは考えすぎであろう。

当然両者の違いを注記の形で示すはずだが、それをしていない)。そして、後人がこの違いに注意を払った形跡はほとんどなく、『南中国』の解説は今日まで踏襲されてきている。

実は、両者の違いに気づいていた人がいなかったわけではない。フィリピン・アウグスティノ会の浩瀚な史料集を刊行した Isacio R. Rodriguez である。彼はラーダの中国行に関する記録3点、パリ本（文書番号66）<sup>22</sup>、サン・アグスティン（67）、マドリッドの王立歴史学士院本<sup>23</sup>（68）を並べている<sup>24</sup>。この史料集が出たのは『南中国』より後だから、ロドリゲスは当然これを知っていて、サン・アグスティンの注記に、ボクサーのコメントをそのまま引用している。

フライ・ガスパール・デ・サン・アグスティンは「上述の使節に起きた出来事はすべてフライ・マルティン・デ・ラーダが記録しており、その報告を少々あまいなくつかの言葉を除き、手を加えずに以下に載せる」と明確に述べている。このバージョンと上述のバージョン（パリ本）、そして写真を入手したもう1つのマドリッドに保存されている文書（王立歴史学士院本）を比較した後では、彼の主張を疑う理由はない。この章全体（サン・アグスティンがラーダを引用した章）をコンマで括ることで、サン・アグスティンは文書を忠実に転写し、これを要約したりパラフレーズしたりしたのではないことを示したのである（カッコ内は筆者の補記。ロドリゲス p.330, 『南中国』 p.124）。

ロドリゲスは何もコメントしていないので、彼の「本音」はこれだけではわからない。しかし、パリ本を精査した彼がサン・アグスティンとの違いに気付かなかったはずはない。

ボクサーの上記の文章自体は必ずしも間違いというわけではない。「3つのテキスト

<sup>22</sup> パリ本にあたって、アウグスティノ会誌版との転写の異同を注記している。ただし、ロドリゲス自身、固有名詞の転写を誤っているところがある。本稿では Gallica の掲載写真に拠る。

<sup>23</sup> これはボクサーがすでに「ラーダの叙述の同時代写本」として取り上げているものだが（『南中国』 p.244）、注において部分的に用いるだけで、このテキストの性格について解説していない。また、注17のオストラザ論文は、ラーダによる簡本バージョンとして、これに言及しているが、このテキストがラーダ自身の手になるものである証拠はない。

<sup>24</sup> *Historia de la Provincia Agustiniana del Smo. Nombre de Jesus de Filipinas*, vol.14, Manila : Arnoldus Press, 1978, pp. 262-352.

の校合作業を経たのちは、サン・アグスティンの言を疑う理由はなくなる」というのは実は理屈になっていないのだが、さりとしてサン・アグスティンの言を虚偽であると決めつけることもできない。ただ、確かなのは、パリ本とサン・アグスティンのテキストが末尾のところできく異なることである。さらに、ボクサーは見逃しているが、サン・アグスティンはラーダの記述を引用した次の章の劈頭において、「これはラーダがチナ旅行についてもたらした最も短く簡潔な記述である」と述べている<sup>25</sup>。サン・アグスティンは複数のテキストの存在を知っていたのである。

ラーダが中国行のテキストを複数残していることは、アウグスティノ会の宣教師の伝記集シリーズを編纂した Gregorio de Santiago Vela がつとに指摘しているところである<sup>26</sup>。彼は、ラーダが1576年5月1日（中国から戻ってきた後、再度渡航しようとする直前。この渡航は実現しなかった）付のフェリペ2世宛書簡に旅行記を添付して送ったのではないかと推測し<sup>27</sup>、さらに、サン・アグスティンが、1577年にマリン（ラーダの中国行の同行者）が「ラーダが口述し、すでにスペインに送った報告」を手ずから書いた、としていることから、それ以前にラーダの報告が作成され、スペインに送られていたとする。また、ラーダはメキシコにいた Alonso de la Veracruz にあてた1576年6月3日付書簡に「手紙とともに旅行記を送った」ことを明記しており<sup>28</sup>、これが「すでにスペインに送られていた報告」にあたるとしている。ボクサーも、これに準拠し、さらに、ラーダの死の直後（1578.6.22）に同胞の Agustín de Alburquerque がフェリペ2世宛に送った書簡の中で、ラーダの文書を王宛に送るつもりであることを述べているのを取り上げて、これが同年マリンの手を経てマドリッドに送られたとする<sup>29</sup>。この

<sup>25</sup> これに続いて、サン・アグスティンはラーダの第2部事物志にあたる部分に言及している。

<sup>26</sup> *Ensayo de una biblioteca Ibero-Americana de la Orden de San Agustín*, vol.6, Madrid: Impr.del Asilo de Huérfanos del S.C.de Jesús, 1922, p.453.

<sup>27</sup> 確かに、この書簡において中国行が簡単におさらいしてあるが、報告を同封するといった文言があるわけではない。注24 Rodriguez, pp.354-356に同書簡は収録されている。

<sup>28</sup> Rodriguez, p.378.

<sup>29</sup> 『南中国』 pp.lxxx-lxxxiii. Rodriguez, p.509. なお、当時のメキシコ副王 Martín Enríquez の王宛書簡（1576.10.31）は、ラベサレスが中国に使節を派遣したことに言及し、王にその報告（las relaciones）が送られることを告知している（Antonio García-Abásalo, *Murallas de piedra y cañones de seda: chinos en el imperio español (siglos XVI - XVIII)*, Univerisdad de Córdoba, 2012, p.27. 前出のサン・アグスティンの記述やラーダの書簡は報告の対象を王としていないが、

ように、ラーダの記録が複数作られ、スペインにも複数送られていることを示す状況証拠はあるのだが、それら複数のテキストと、パリ本ないしサン・アグスティン引用のラーダの関係は不明のままである。

2本に共通する原本をより忠実に反映したのがパリ本で、サン・アグスティンが基づくテキストは最後のところを改変した（後述するように、単に縮めたり、パラフレーズしたりしたとは考えられない）とみるか、あるいは逆にパリ本のほうが改変を加えたのか（その可能性は小さいと考えるが）、それとも上述したように、ラーダが別々の時期にテキストを複数作っていたのであれば、2本が拠ったテキストが違うのか、様々な可能性が考えられるが<sup>30</sup>、いずれも決め手を欠く。中国使節行に関するテキストには、このような未整理の点や曖昧な部分が残されているのである。

また、関連史料としてラーダに随行した軍人ロアルカの記録、そして前出のメンドーサのテキストが存在するが、それらとラーダの関係性も曖昧で、今までまともに取り上げられたことがない。メンドーサが材料としてラーダ、ロアルカを使っているとざっくり言われているにすぎない。おそらく、研究者のほとんどがこれらの「西洋人による早期の中国記述」を、中国文明観を検討するためのテキストとして一括して扱うために、彼らにはテキストの細かな相違は余り意味をもたないのだろう。しかし、現場にいなかったメンドーサ（国王から中国への使節に任じられたことが著作の動機だが、彼自身はメキシコまでしか行っておらず、太平洋を越えていない）は別として、ラーダやロアルカのテキストは文化的記述であるまえに、何よりも当時のフィリピン諸島と中国大陸の交渉史の産物である。そうした観点に立つと、細かな差異も意味を持ち始めるのである。

そこで、それぞれのテキストがどういう性格をもつものなのかを再確認することから始める。まずは、サン・アグスティンから。

---

これを見れば、ラベサレス→エンリケスを経て公式ルートで報告が王に届いたことが分かる。

<sup>30</sup> 後述するように、サン・アグスティン著は出版時点で本人のあずかり知らぬ改変が加えられており、この部分についてもその可能性はなくはないが、本国の修改者にそれだけの材料があったとは思えない。



## 2、サン・アグスティン『フィリピン諸島征服記』

サン・アグスティンの『フィリピン諸島征服記』は、日本語訳もあるアントニオ・デ・モルガの『フィリピン諸島の出来事』<sup>31</sup>や20世紀初頭に英訳されたイエズス会士ペドロ・チリーノの『フィリピン諸島志』(Blair and Robertson, *The Philippine Islands*, vol.12, pp.173-321 and vol.13, pp.29-217)<sup>32</sup>に比べれば、少なくともスペイン語圏以外での知名度はぐんと落ちる。ブレアとロバートソンの『フィリピン諸島』にも訳載されていない<sup>33</sup>。Donald F. Lach の『アジアの形成におけるヨーロッパ』にとりあえずの書誌的言

<sup>31</sup> 1868年にHenry E. J. Stanleyによる英訳がハクルート協会叢書に収められ、フィリピンの英雄José Rizalが外遊先の大英博物館で本書を読んだのを契機に1890年にパリで注解本を刊行、1909年にはスペインの行政官でフィリピン研究に多大な功績を挙げたWenceslao E. Retanaが注解に加えて未刊のモルガ関連史料を添付した新版をマドリッドで刊行した。その5年前にロバートソンが『フィリピン諸島』に英訳を載せ、これは単行本にもなっている。スタンリー、ロバートソンの両英訳ともに再刊されており、「フィリピン史といえばモルガ」といってもよいほど、他の作品に比べて人気が高い。その高評価の背後には、著者が俗人の官僚であって、「修道会的偏見」から自由であるという見方が存する。そもそも、リサーチにしてもレターナにしても政治的には「反修道会」だった（後者は当初修道会に味方していたが、フィリピンがスペイン支配から脱するとその立場を変えた）。また、本書にはスペイン系の年代記にありがちなメガトン級のボリュームがなく、簡便なことが歓迎される一因だろう。しかし、これは逆に言うと、含まれている情報量がそれほど多くないということでもある。

1966年の神吉敬三・箭内健次による日本語訳（『フィリピン諸島誌』、岩波書店）に続き、5年後に出たJames S. Cumminsによる英訳新版（やはりハクルート協会叢書に収録）が今日にいたるまでスタンダードなテキストとなっている。1997年には、フィリピン初期史の代表的研究者であるPatricio Hidalgo Nucheraが、脚注にリサーチ、章末にレターナの注を配し、その他レターナ本の添付資料を収録した新版を出している。*Antonio de Morga Sucesos de las Islas Filipinas*, Madrid: Ediciones Polifemo, 1997.

<sup>32</sup> この後、Ramón Echevarriaによる新訳が出た。*Relación de las Filipinas = The Philippines in 1600*, Manila: Historical Conservation Society, 1969. なお、チリーノはイエズス会史を書き続け、その稿本は未刊のままに終わったが、José S. Arcillaによる英訳が最近出た。Jaume Gorritz i Abella ed., *History of the Philippine Province of the Society of Jesus*, 2 vols, Ateneo de Manila U.P., 2009-2010.

<sup>33</sup> ただし、本書の続篇を別人の著作として（後述参照）、各所で大いに使っている（vol.25, pp. 151-200, vol.29, pp.259-276, vol.32, pp.149-284, vol.41, pp.277-324, vol.42, pp.117-312, vol.45, pp.170-173）。

なお、本史料集の大半はセビーリヤのArchivo General de Indias所蔵の未刊史料であるが、既刊本も数多く収録している。当時、それらがすでに稀覯書になっていたからである。チリーノのほかには、メンドーサ（ロバートソンが翻訳。これ以前にGeorge T. Staunton編集による

及はあるが、不完全なものであり<sup>34</sup>、ボクサーも使っていないながら本書の性格には触れていない<sup>35</sup>。その後、1975年にアウグスティノ会士史家 Manuel Merino による注解本が出版され、刊行後300年、独立宣言から100年後の1998年にはフィリピンで Luis Antonio Mañeru による西・英対訳本が出た<sup>36</sup>。しかし、いずれもアウグスティノ会のサークルから出たものであり、頒布数も多くはない（後者は限定1000部）。

そこで、前者のメリーノによる序説 (Introducción) によって書誌情報を補っておく<sup>37</sup>。著者は1650年にマドリッドで生まれ、アウグスティノ会に入った後、1667年にフィリピン布教に出発、メキシコを経て翌年に諸島に達した。道中のアカプルコで、やはり布教に向かう途次のイエズス会士ディエゴ・ルイス・デ・サン・ビトーレス（マリアナの布教に当たり、殉教したことで有名）に会っている。1677年の管区会議で管区プロクラドル（行政当局との折衝役）に任命され、80、83年にも再三選されたのは

---

1588年刊の Robert Parke の英訳版翻刻がハクルート協会叢書に収められている) のフィリピン関連部分 (vol.6, pp. 81-153)、モルガ (ロバートソンらによる翻訳。vol.15 and vol.16, pp. 25-209)、Bartolomé Leonard de Argensola の『モルッカ征服記』(ロバートソンによる部分完訳・部分縮約。vol.16, pp. 211-317)、Juan de Medina の『アウグスティノ会布教史』(刊行は19世紀末。ロバートソンによる部分完訳・部分縮約、vol.23, pp. 119-227 and vol.24, pp. 29-179)、Diego Aduarte の『ドミニコ会聖ロザリオ管区史』(訳者のクレジットなし。部分完訳・部分縮約。vol.30, pp.115-321, vol. 31, and vol.32) などである。なぜ、ファン・デ・メディナの『布教史』(1630年までを扱う) が採録されて、サン・アグスティンが選ばれなかったのかはわからない。

<sup>34</sup> Donald F.Lach and Edwin J.van Kley eds., *Asia in the Making of Europe, vol.3: A Century of Advance, book 1*, The University of Chicago Press, 1993, pp.364-365. ラックらは Robert Streit, *Bibliotheca Missionum V. Asiatische Missionslitteratur 1600-1699*, Aachener Missionsdruckerei, 1929, pp.319-324 に依拠して、出版されたのが第1部 (太平洋の発見から1614年(ママ)に至るまで) であること、1616年~98年(ママ)を扱った第2部の草稿がフィリピンに保存されており、これが1890年にマドリッドで刊行されたことを述べる。しかし、シュトライトが掲げる第2部の目次をみれば、1694年までを扱っていることがわかる。

<sup>35</sup> 『南中国』 p.lxxvii, lxxxiii, and Bibliography, p.346 において、サン・アグスティンがラダに忠実に従ったこと、彼が17世紀末頃にメキシコでラダの文書にアクセスしたと述べていることに言及するだけで、要するにラダとのかかわりにしか関心を払っていない。ちなみに、'about the end of the 17<sup>th</sup> century' とぼかした書き方をしているが、サン・アグスティンがメキシコに滞在したのはフィリピンに渡航する途次の1667年から68年にかけてのことである。

<sup>36</sup> Pedro G. Galende, O.S.A. ed., *Conquistas de las Islas Filipinas de las Islas Filipinas (1565-1615)*, Manila: San Agustín Museum, 1998.

<sup>37</sup> Manuel Merino, O. S. A.ed., *Conquistas de las Islas Filipinas (1565-1615)*, Madrid: Consejo Superior de Investigaciones Científicas, 1975, Introducción, pp. XIII-LXIV.

その手腕を買われてのことであった。会の修史にいつ携わるようになったのかを明示する史料はないが、メリーノはプロクラドル任命と同時だったのではないかと考えている。とにかく、1646年までの内容を含む第1部は1686年に完成し、管区長も同年に出版許可を与えた。原稿は同年の管区会議でマドリッド・ローマに派遣されることに決まった Alvaro de Benavente（会の中国布教の礎を築いた人物でもある）に託された。しかし、実際に出版されたのは1698年である。ベナベンテのヨーロッパでの多面的な活躍がかえって災いしたのか<sup>38</sup>、原稿はマドリッドのサン・フェリペ修道院に託されたままになった。この原稿を刊行にまでもっていったのがマドリッド管区代表 Manuel de la Cruz だが、2つの大洋を遠く隔てた著者が知る由もない修改を加えていた（メリーノは、フィリピンに到着した刊本を見た著者がそれを "primera parte" ではなく "primer trozo" と呼んでいること、つまり彼がこれを「第1部」として完結したものとみなしていなかったことに注意を喚起している）。

一方、著者自身はその後も孜々と修史に励み、それは1724年に亡くなる直前にまで及んだという。メリーノは18世紀の会士 Agustín Marín de Castro がサン・アグスティンの著作を列挙した後に「1616年から1691年（ママ）までを含む第2部」の草稿がマニラで保管されていると付記していることを指摘する。この草稿がようやく世に出たのが、ラーダの記録も掲載した前掲の *Revista Agustiniiana* (vol.14 から *La Ciudad de Dios* と改称) においてであって、創刊号から10年にわたって連載され、1890年には1本にまとめられてバリャドリッドで刊行された。ただ、その際に編者の Tirso López がタイトルで「第1部の著者ガスパル・デ・サン・アグスティンが収集した材料を使って Casimiro Díaz が著作した」と説明したために、第2部はサン・アグスティンの著作とみなされないことがある（ブレアとロバートソンもそう見ている）。メリーノはそれに対し、第2部の作者も同様にサン・アグスティンでしかありえないことを、具体例を引いて示している（しかし、彼は自らの編集版に第2部を含めてはいない）。

ただ、自らも会士であるメリーノにとって、本書の価値は自明だからなのか、あらためてその内容にコメントを加えてはいない。筆者の知る限りでは、メキシコ史の研究

<sup>38</sup> 彼はバタビア→喜望峰→イギリス→オランダ経由で帰国し、立ち寄ったアムステルダムでの出版も一時考えたが、断念したという。

者として名高い Eugenia Meyer が若かりし頃に本書の内容のあらましを紹介した文章を書いているが<sup>39</sup>、本稿に関連する部分に注視しているわけではないので、ここで全書の中でラーダの中国行がどのような位置づけになっているのかをまず示しておきたい。

1698年に刊行された本書のフルタイトルは、*Conquistas de las Islas Philipinas : La temporal, por las armas del Señor Don Phelipe Segundo El Prudente; y la spiritual, por los religiosos del orden de nuestro padre San Augustin: fundacion, y progressos de su Provincia del Santissimo Nombre de Jesus, Parte Primera* である。副題にあるように、「征服」はフェリペ2世の武力による俗的側面とアウグスティノ会の布教による霊的側面の双方から行われたという理解である。力点は後者にあり、イエズス会（チリーノ）、ドミニコ会（アドゥアルテ）、フランシスコ会（リバデネイラ<sup>40</sup>）といったフィリピン各修道会の布教史ジャンルの1冊である。しかし、植民初期の歴史についていえば、レガスピの植民事業を航海技術で支え（ウルダネタ、ラーダ）、本国に赴いて王にフィリピン事情を報告し（エレーラ）、政庁初の大陸への使者に立ち（ラーダ、マリオン）、王の使節として中国宮廷に派遣される（メンドーサ、マリオン、オルテガ）など<sup>41</sup>、植民初期におけるアウグスティノ会士の政治的活躍は目覚ましく、またレガスピとともに渡航した一番乗りの修道会として、後続のフランシスコ会（1577）、イエズス会（1581）、ドミニコ会（1587）に対しても、少なくとも16世紀の間は圧倒的なプレゼンスを保ち続けた<sup>42</sup>。アウグスティノ会の歴史は同時にスペイン人統治初期の状況を照ら

<sup>39</sup> “Fray Gaspar de San Agustín, cronista de Filipinas,” in *Anuario de Historia*. año IV, 1964, pp.118-133.

<sup>40</sup> Marcelo de Ribadeneira, *Historia de las Islas del Archipiélago y Reynos de la Gran China, Tartaria, Cuchinchina, Malaca, Sian, Camboxa y Iappon, y de lo sucedido en ellos a los Religiosos Descalços, de la Orden del Seraphico Padre San Francisco, de la Provincia de San Gregorio de las Philippinas*, Barcelona, 1601. 本書には現代版も存在するが（Juan R. de Legísima, O.F.M. ed., Madrid: La Editorial Católica, S.A.,1947）、他の修道会史と異なり、まだ英訳が存在しない。

<sup>41</sup> これら初期のアウグスティノ会士の群像については、Dolors Folsh, “Biografía de Fray Martín de Rada,” in *Huarte de San Juan: Geografía e Historia*,15, 2008, pp.33-63が要領よくまとめている。

<sup>42</sup> フランシスコ会士は80年代に急速に増加していくが、それでも1591年段階で現地民布教にあたったフランシスコ会士42人に対し、アウグスティノ会士は79人いた。Blair and Robertson, vol.8, p.140.

し出すものなのである。

全書は3部に分かれ、それぞれが46、38、31章から成る（ちなみに、メリーノ本ではそれぞれ275、245、202頁分）。第1書は、その第1章に「バルボアの南海（太平洋）発見」というタイトルがついているように、征服の前提としての太平洋進出から切りだし、モルッカからやってきてデマルカシオン（トルデシヤス条約による分界線）を盾にスペイン人退去を求めたポルトガル人との対決（1569）まで、第2書はレガスピがモルッカのポルトガル人の圧力を避けるべく当初の基地セブからパナイに移ったところからはじまり、初代司教ドミンゴ・デ・サラサールが来島して司教座教会が建てられる（1581）まで、第3書は長官ゴンサロ・デ・ロンキーリョの統治から日本での殉教者の話までとなっており、全体で半世紀の時間を扱っているといっても、実際には初期の15年間に大きな比重がある<sup>43</sup>。このうち、ラーダの中国行関連の記述は第2書の第16章から25章（メリーノ本ではpp.401-465）を占める。以下、中国使節行に至るまでの記述を章ごとに略述しよう。なお、林鳳の襲撃について語る史料は数多いが<sup>44</sup>、ラーダらの中国行まで叙述しているものには、サン・アグスティン以前には、ラーダの記録（前出のパリ本）とともに、ラーダに随行したミゲル・デ・ロアルカの記

<sup>43</sup> タイトルページの図版は、サン・アグスティンが指示して描かれたものではないが、右方に配されるフェリペ2世、レガスピに対して、左方には司教アウグスティヌスの背後にウルダネタとラーダの2人が描かれており、本書の性格をよく表している。

<sup>44</sup> Blair and Robertson には、林鳳の襲撃について語るものとしてラーダの帰朝を迎えた新長官 Francisco de Sande の報告しか収められていないが、Virginia Benitez Licuanan and José Llavador Mira eds., *The Philippines under Spain: A Compilation and Translation of Original Documents*, Book 3, Manila, 1993 には多くの史料の英訳を収める（なお、本史料集はインディアス総文書館の文書を英訳したもので、ブレア&ロバートソン未収録の文書を多く含んでいる点は有用だが、1602年までを扱う6巻で刊行は中断したままである。また、フィリピンチームによる翻訳・刊行をうたうのみで、先行するブレア&ロバートソンには一切言及せず、文書の解題や背景の説明もない。個々の資料がどのセクションにあるのかも当初は明示されず、途中から示すようになったが、往々にして不正確である）。

林鳳の事件を扱うものには、Juan Francisco Maura, “La Relación del suceso de la venida del tirano chino del gobernador Guido Lavezas: Épica española en Asia en el siglo XVI,” in *Anexos de la Revista Lemir*, 2004, pp.2-26 が紹介する史料もある。これまたアウグスティノ会誌にかつて載せられた無名氏の報告を、その内容から長官ラベサレスによるものと確定し、写本の写真を初めて公表したものである。以下、これを「ラベサレス報告」と呼ぶ。

録とメンドーサがある<sup>45</sup>。メンドーサについてはここで説明を要しないであろうが（日本語訳の解説を参照）、ロアルカの認知度はスペイン語圏外ではそれほど高くないのでここで説明しておく。

ロアルカのテキスト（“Verdadera relación de la grandeza del Reyno de China”「チナ王国の巨大さについての真実の報告」）にいち早く注意を喚起したのは、御多分にもれずサンティアゴ・ベラである。彼はアウグスティノ会伝記集第3巻のメンドーサの項目において、ロアルカのテキストに言及し、その構成（第1部は13章で構成され、林鳳の襲来から使節の帰還までを叙述、第2部は11章で中国事物誌。つまり、ラーダと同じ構成を取っている）を紹介し、マドリッドの国立図書館に18世紀の写本(no.2902)があることを指摘し、ロアルカがラーダの証言をたびたび引用しているとする<sup>46</sup>。ついで、Antonio Rodriguez-Moniñoが王立歴史学士院所蔵の極東関連史料を紹介する中で、ロアルカのテキストについて同院所蔵の16世紀の写本<sup>47</sup>、国立図書館の17世紀末～18世紀初とみられる写本(no.3042)とこれを模写したものとして前掲のno.2902を挙げている<sup>48</sup>。

このテキストを英語圏で紹介した功はボクサーに帰せられる。彼は『南中国』の中で、このテキストをラーダの中国使節行の現存史料の中でもっとも完善なものとして評し(p.xlv)、注の中でも時折利用している<sup>49</sup>。そして、本記録がラーダ同様に2部で構成され、第2部の叙述の順序、内容がラーダのそれと一致しないが、おおむね近似していると指摘する(p.348)<sup>50</sup>。しかし、これだけ高く評価しながら、ボクサーはやはりラーダの知名度を重んじたのか、ロアルカを『南中国』に収めなかった。以後、今日に至るま

<sup>45</sup> ちなみに、モルガはごくあっさりと言及しているだけである。

<sup>46</sup> *Ensayo de una biblioteca Ibero-Americana de la Orden de San Agustín*, vol.3,1917, pp.230-233.

<sup>47</sup> Dolors Folch Fornesaが転写したテキストがウェブで閲覧可能（中国関連のスペイン語文書史料のデジタル化を進めている‘China en España,’ <http://www.upf.edu/asia/projectes/che/principal.htm>）だが、本稿ではやはりウェブで見られるスペイン国立図書館本ms.2902 (<http://bdh-rd.bne.es/viewer.vm?id=0000116678>)を使用した。フォルクの転写と比較すると、内容はほぼ同じ（字句の脱落や数字の違いはある）だが、漢語の固有名詞の転写にはかなりの違いがある。その場合は（ ）内にフォルクの転写を示す。

<sup>48</sup> *Boletín de la Academia de la Historia*, 98, 1931, pp.423-424.

<sup>49</sup> 使用されたのは、王立歴史学士院本である。

<sup>50</sup> 実際には、近似しているとはおよそ言い難い。

で英訳は出ていない<sup>51</sup>。Santiago García-Castañónが国立図書館所蔵の2本を転写した校訂本を出している由であるが、未見である<sup>52</sup>。また、ルビエスはパリ国立図書館にロアルカの写本を見出し（Fonds Espagnol 579, ff.1-56）、それを王立歴史学士院本と比較して、後者ほど詳しくなく、1576年5月1日に長官サンデに献呈されたとあることから、それ用に修正・短縮されたのではないかとしている<sup>53</sup>。

ロアルカ、メンドーサ、ラーダのパリ本に共通しているのは、主題が中国行にあるので、林鳳の襲撃に始まって使節派遣に至る経緯はその導入に過ぎないということである。ロアルカやパリ本はそのことを冒頭に述べているし、メンドーサも当然そういうつもりで書いている<sup>54</sup>。それでも、ロアルカの記述はかなり詳しく具体的で、メンドーサがそれに次ぐ。それに対して、パリ本は簡略である。

また、あらかじめもう1つ指摘しておくべき事柄は、中国旅行記の部分について、ロアルカとメンドーサのテキストは近縁性が高いが、両者とラーダの間にはかなりの径庭があるということである。ロアルカとメンドーサには違いもあるが（具体的には次章で注記する）、叙述の構造は共通しており、メンドーサがロアルカを下敷きにしたと考えてよい。しかし、記事量を比較すれば、ロアルカよりメンドーサのほうが随分多い。そのかなりの部分は文飾・潤色のたぐいと判断されるが、具体的な点でロアルカには見られないところもあり、少なくとも現存のロアルカ写本を前提とする限り（現存の写本がオリジナルを縮約したものでなく、忠実な転写であるとすれば）、メンドーサはほかにも材料を仰いだということになる。ボクサーが、メンドーサがロアルカを利用したことを指摘しつつも、メンドーサがメキシコでマリンから得た情報を重視しているのもそのためである（『南中国』p.lxxxix）。たしかに、メンドーサ自身マリンに多くの情報を確認したと述べてはいるが、その内実が不明である限り、これは推測にすぎない。ラーダに複数のテキストが存在するのであれば、現存しないものをメ

<sup>51</sup> 英語圏では、Robert Richmond Ellis, *They Need Nothing: Hispanic-Asian Encounters of the Colonial Period*, University of Toronto Press, 2012が他のスペイン人の記録とともに、ロアルカを利用しているが、眼目はやはり「西洋人から見た中国」にある。

<sup>52</sup> *Verdadera relación de la grandeza del Reyno de la China (1575)*, Eco de Luarca, 2002.

<sup>53</sup> 注21 “The concept,” p.334.

<sup>54</sup> 日本語訳 p.275.

ンドーサが底本にした可能性も考えられるからである。しかし、現実に残っているのは1つだけ（本稿の明らかにするところによれば、2つと言えなくもないが）なのだからどうしようもない。

もともと埋まらないピースがあるので、これらのテキストの相互関係を説明することは無理というほかないが、にもかかわらず使節行の前後に分けて比較を試みるのは、それぞれのテキストの立場によって生じる記述の違いが、「西洋人の中国観」という観点で大きく括ってしまうことで見えなくなってしまうからである。それを可視化することが果たして価値を持ちうるかどうかは、読者の判断にまつしかない。

\*                                 \*                                 \*

第16章「ファン・デ・サルセドがイロコス地方にフェルナンディーナ市を建設。海賊リマホンの諸島來航について」（メリーノ本 pp.401-405。以下同じ）

1574年の初頭、ファン・デ・サルセド（レガスピの孫である）がイロコスに派遣され、植民都市フェルナンディーナ（当時の王太子の名にちなむ）を創設した。長官（レガスピの死後あとを継いだグイド・ラベサレス）はサルセドにルソン島北端のカガヤン遠征を命じた。その狙いはヌエバ・エスパーニャ（メキシコ）とチナ等周辺諸国をつなぐ通交の基地を作ろうというものであった。

レガスピは1571年にマニラに拠点を置いたがけっして交通の便はよくなく、メキシコからマニラの外港カビテに入港するのは奇跡と言われたこともあった。カガヤンにはそうした難点がなく、前面のバブヤネス諸島を足掛かりに大陸を望むこともできる。著者がここで、「ラベサレスのこの深謀が実現していたら、諸島の保全・増進にとってきわめて大きな重要性をもったであろう」としているのが興味深い。レガスピがセブからマニラに拠を移したのは、その志向がモルッカから大陸に変わったからだ（それは同時にポルトガル人勢力との衝突を避けることでもあった）と一般的に説明されるが<sup>55</sup>、ルソン島の中でマニラが必ずしも最善の選択とは限らなかったことは注意されてよい。なお、ラベサレスはこの年に中国製の『古今形勝之図』を本国に送っているが、その送付について説明する書簡の中で「ルソンの北方カガヤン地方の海岸・大河から

---

<sup>55</sup> 『南中国』 p.xli.



チナのもっとも近い地域までの距離は40レグア内外である」と述べている<sup>56</sup>。

さて、サルセドが先遣隊として派遣した20人<sup>57</sup>が乗った船がフェルナンディーナから7レグア<sup>58</sup>来たところで、大船団と遭遇した。

サン・アグスティンはここで船団の正体を明かす。指揮官の名はLimahón（林鳳）<sup>59</sup>。中国沿海部のTiukiu<sup>60</sup>市出身で、海賊Tialauのもとに身を寄せ<sup>61</sup>、彼の死後そのあとを

<sup>56</sup> ラベサレスが言及するこの地図を『南中国』は『広輿図』としているが（p.xlii）、榎一雄が『古今形勝之図』と確定した（「古今形勝之図について」『東洋学報』58-1/2,1976,pp.1-48.のち、『榎一雄著作集』第7巻、汲古書院、1994に収録）。なお、同図は2007年に修復が完成したことで再び注目を集めつつある。その後の研究に李毓中「「建構」中国：西班牙人1574年所獲大明《古今形勝之図》研究」（『明代研究』21,2013,pp.1-30）がある。

<sup>57</sup> ロアルカ、メンドーサは25人とする。ラーダパリ本で、サルセドが登場するのはマニラに救援にかけつける場面からである。

<sup>58</sup> ロアルカは3,4レグア、メンドーサは4レグアとする。

<sup>59</sup> 林鳳については、英語圏ではCarrington Goodrich and Chaoying Fang eds., *Dictionary of Ming Biography 1368-1644*, vol.1, New York: Columbia U.P.,1976の林鳳の項目（pp.917-919. 執筆者Jung-pang Lo 羅榮邦）がしばしば引照される。ここで、フィリピンに現れる前までの漢文史料の記述を陳荆和（『十六世紀之菲律賓華僑』、香港中文大學新亞研究所東南亞研究室、1963）によってまとめておこう。潮州饒平の出身。その大おじ（林国顕）は呉平・曾一本といった海賊の頭領と連携して海岸を荒らしていた。彼の名の『明実録』初見は、隆慶六年八月庚辰（1572.10.3）条の巡按広東御史楊一桂の上奏文中であり、この時の勢力は500～600人とされている。胡居仁率いる福建水軍に敗れ、1574年7月に帰順を乞うた時の勢力は1万人に達していたとされ、同年十（11）月の記事によれば拠点澎湖から台湾西岸の魍港に移したという（pp.33-34）。しかし、こうした漢文史料とスペイン語史料の記述は、なかなかかみ合わない。近年の湯開建「明隆万之歳粵東巨盜林鳳事迹詳考—以劉堯誨《督撫疏議》中林鳳史料為中心」（『歴史研究』2012-6, pp.43-65）は副題に示される未紹介の史料（劉は当時の福建巡撫）を用いて、これまでより格段に詳しく林鳳の足跡をたどっている。それによって、彼の動向を簡単にまとめておくと、①万暦元年（1573）前半に澎湖に逃れる→②同年十月に潮州で朝廷の招撫を受ける→③二年四月に海南島へ逃れる→④五月末に澎湖へ→⑤六月に台湾の魍港へ→⑥七月に新港で明軍と現地民の連合軍に敗北して澎湖へ→⑦十一月、再び新港へ→⑧同月七日（1574.11.19）に台湾を離れてルソンへ。これで彼の足跡はかなり解明されたが、後述の林道乾集団とのかかわりについては不明のままである。湯開建は、スペイン語史料の記述を信じて林道乾集団を破った林鳳が勢力を拡張したとする曹永和や陳荆和の意見に否定的で、林道乾が万暦元年にカンボジアに逃走した後、その集団の多くが諸良宝と林鳳に帰したと推測しているが、穏当な見解であろう。

<sup>60</sup> ロアルカはTrucho（Frischo）、メンドーサはTruecho、パリ本はTiuchiu（RodriguezはTinchinとするが、誤り）、ラベサレス報告はTeuchioである。Tiukiuに近いのはパリ本である。漢文史料に彼の出身地を潮州とすることから、先行研究は一致してこれを潮州に比定する。

<sup>61</sup> ロアルカ、メンドーサにはこうした話は見えない。Tialauが誰かは分からないが、前掲湯論文が指摘するように林鳳は諸良宝と行動を共にし、その死により集団を吸収しているところからして、彼に当たるのだろう。ラベサレス報告は林鳳の仲間の名前としてgobunまたはgobin（お

継いだ。勢力を拡張し、40隻の船を擁するようになった頃には、「レバントのバルバロッサやドラゲート」なみに恐れられるようになり、皇帝の海軍との戦いにも勝利を収めることがしばしばで、負けた場合の避難所を Pehou（澎湖）島に置いていた。別の海賊 Oukian が 90 隻の船団<sup>62</sup>をひきいて出動してきたのを迎え撃って勝利をおさめ、その勢力を吸収して所有船は 200 隻に達した<sup>63</sup>。力で彼を屈服させられないと見た皇帝は赦免状をえさに彼を捕えようとしたが、見透かされて失敗、招諭の使者は殺されたので、3人の勇敢な指揮官にそれぞれ船団を率いさせて本格的な掃討を試みた<sup>64</sup>。おいつめられた林鳳は、マニラから来たチナ船<sup>65</sup>を鹵獲し、その乗員からルソンの富とスペイン人

---

そらく呉平であろう)を挙げ、彼らが潮州で決起した時、これに従わなかった 52000 人を殺害、その手勢は 50000、うち戦闘員は 30000 とする。明らかに誇大広告であるが、林鳳らの集団が戦闘員だけでなく、女性や子供も数多く含んでいたのは、後のフィリピン渡航においてもそうであり、注目されてよい。

<sup>62</sup> ロアルカは Lintoquiam, メンドーサは Vintoquián とし、その船団をともに 60 隻とする。パリ本は lintoquian, 70 隻とする。林道乾を指し、サン・アグスティンでは頭の部分が落ちて Oukian となったものである。林鳳と林道乾が海上で覇権を争い、一大決戦を行ったことを記す漢文史料を、管見の限りでは知らない。

<sup>63</sup> ロアルカは両者の戦闘が発生したのを大陸から 25 レグア離れた Lon 島とし（後の記述では Plon 島とする。おそらく Pehou と Plon は転写による違いであろう）、戦いの結果林鳳が勝利をおさめ、敵船 60 隻のうち 57 隻を鹵獲、林道乾は残りの船で脱出したとする。メンドーサは Lon 島の名には触れず、鹵獲船数を 55 隻とする。パリ本は Pehou で戦ったとする。

<sup>64</sup> ロアルカは、沿岸部の副王（巡撫）たちが 130 隻の船団を派遣し、林鳳がチナから 40 レグアにある tontzua stacoatiam (Tusilzuam-stacaoticam) に退避したとする（メンドーサは Tonzuacaoticam）。メンドーサはさらに軍勢を 40000 とし、総司令官を Homonco（王望高）としている。サン・アグスティンはここでは 3 人の名を挙げないが、後のところでその 1 人が王望高であると述べる。退避地点について、陳荆和は澎湖の古名が「大山嶼」であり、また媽祖をまつた官廟があったことからこれを「大山官港」に比定する（p.35）。パリ本は林鳳が 2 度官軍に敗れた時の退避地点を pehou と、そこから 9 レグアの距離にある takao として、後者を人口の多い大きな島と形容し、林鳳は後者に 1 年半滞在していたとする。

なお、ラベサレス報告は林鳳側を 400 隻、官船を 1350 隻と増やし、派遣された 3 人の司令官を Oquean（福建）の長官 chiuchiantian, quitance（広東）の長官 Zeuichiachian, Zelanche（浙江）の長官 abuiz anchian とし、官軍に敗れた海賊の頭目のうち gobin（前出の gobun と同じ人物だろう）が死亡、林鳳は逃亡してマニラを襲ったとする。この報告によれば、林鳳掃討は 3 省合同の大きな作戦だったことになる。当時の福建巡撫劉堯誨が倭寇対策に力を入れ、両広総督と共同で省界に南澳副総兵を置き（『登壇必究』巻 10「福建事宜」）、『明実録』にも林鳳討伐にあたって福建と広東が協力したことは記されるが、浙江は当然無関係である。

<sup>65</sup> パリ本は 1 隻、ロアルカは数隻とし、メンドーサは 2 隻とする。

の存在を知るに至り、船団のうち 62 隻<sup>66</sup>、兵 2000、さらに婦女 1500 からなる集団を率いてマニラに來襲したのである<sup>67</sup>。

なお、当時のスペイン人の記録は口を揃えて林鳳の襲撃が彼らにとって予想外だったとするが、彼らが中国人海賊の動きに無知だったというわけではない。この年の 7 月 16 日付の無名氏報告には「チナ大陸では内戦が発生し、沿海部には多くの海賊が現れ、昨年マニラから出航した船の 1 隻が鹵獲され、船員は残らず殺されたという」とある<sup>68</sup>。ただ、その矛先が自らに向けられることを予知するには、林鳳の動きがあまりに急だったということなのだろう。

第 17 章「リマホンがマニラ湾に到着した経緯、市に対する最初の攻撃、野戦司令官の死と敵襲によっておきたその他の出来事」(pp.407-413)

林鳳がマニラの近くの Mariveles 島<sup>69</sup>に到着したのは使徒聖アンドレスの日の前夜 11 月 29 日である。先鋒として日本人 Sioco が兵 600 をひきいて Parañaque に上陸し<sup>70</sup>、マニラを目指した。これをみたモーロ人(ムスリム)がマニラにかけつけ、ボルネオのモーロ人が攻めてきたと報じた。マニラのスペイン人にとって仮想敵はポルトガル人あるいはボルネオのムスリムであったから、この情報はそれなりの信憑性を帯びていたが、当時自宅で病に臥せていた野戦司令官 Martín de Goyti は本気にしなかった。季節からしてボルネオ人の來襲はありえないし、他は恐れるに足りないと思ったからである。

<sup>66</sup> 林鳳の襲來時にミンドロ島にいたアウグスティノ会士アルブルケルケは 1575 年 6 月 5 日付書簡において、林鳳の船団を 150 ~ 200 トン級の船 70 隻とする(注 24 Rodriguez, p.238)。

<sup>67</sup> 残りを Banzán に置いたとする。Banzán は漢文史料の記述を見ても、魍港だろうと思われる。

<sup>68</sup> AGI, Patronato 24,R,28, “Relación de lo sucedido en las yslas felipinas desde primero de Julio del Anno de 1573 hasta el día que salieron del Puerto de manila los dos navios nombrados Santiago y espiritu santo”。

<sup>69</sup> ロアルカ、メンドーサ、パリ本はマニラ湾に到着したとする。現在のマリベレスはマニラ湾をはさんだ位置にあるバター半島の突端部分であるが、ここでは海上に浮かぶコレヒドール島を指す。

<sup>70</sup> マニラの南にある。上陸地点について、ロアルカとメンドーサはマニラから 1 レグアの距離と述べるだけで地名には触れない。パリ本はマニラから 2 レグア離れたドンガロとする(パラニヤケと同じ場所を指す。この時抵抗したスペイン人ガロにちなんで名がついたと言われる)。兵数を 3 者は 400 (メンドーサは銃隊 200、槍隊 200 と内訳を示す) とする。3 者とも日本人シオコには言及しない(シオコを羅榮邦は「莊公」とするが、根拠不明)。なお、3 者はこの時に「神風」が吹いたために晩のうちに上陸できなかったことが事態を大きく左右したとするが、サン・アグスティンは強風によって上陸地点が変わったとするだけである。

彼はこの油断のために真っ先に血祭りにあげられることになった。長官ラベサレスは襲撃の報に接して防御態勢に入った。当初は中国人側が押し気味であったが、やがて形勢が逆転し、シオコは林鳳のもとに引き上げた。この日のスペイン人の死者は14人、当時の人口<sup>71</sup>を考えるなら決して少なくない。林鳳はシオコから戦況について聴取すると、兵を休めるために次の攻撃を3日後に設定した。著者は、もし翌日に攻撃をしかけられていたら、マニラは落ちていただろうと言う。

長官はマニラ周辺にいるスペイン人全員に動員をかけた。この時点でもボルネオ人の来襲であると疑い<sup>72</sup>、現地のムスリム首長2人（Numanatay と Rajabago）<sup>73</sup>の内通を疑って逮捕、彼らは結局殺された<sup>74</sup>。援軍50人をひきいて駆け付けたサルセドを長官は野戦司令官に任じた。一方、シオコは再び1500人をひきいてマニラに迫った<sup>75</sup>。この時に修道院も焼失している。敵はついにスペイン人が立てこもる要塞にまで攻め入ったが、なんとか追い返した。

前述したように、この来襲に関するパリ本の記述は簡略であるが、アウグスティノ会による中国布教の前史の記述は、ロアルカより具体的である<sup>76</sup>（メンドーサは、ラーダの中国志向をとりあげるだけで、やはり会の動きを述べることはない）。第1章「大チナ情報」で、マルコ・ポーロのカタイがチナに同じいこと<sup>77</sup>、スペイン人のフィリピン到来以後毎年のようにチナ人が交易にやってくることを述べた後、1572年にアルブルケケとオルテガが、73年にはアルブルケケが単独で渡航を試みようとしたが、チ

<sup>71</sup> アウグスティノ会士アルブルケケ書簡（1575.6.5）によれば、当時スペイン人の4つの集住地であるマニラ、セブ、フェルナンディーナ、サンティアゴ・デ・リボン（カマリネス島）の各都市にいた者たちを合わせても460人、しかも、マニラからミンダナオに150～160人が出征予定だったといい（Rodriguez, p. 242）、来襲はまさしく晴天の霹靂であった。

<sup>72</sup> ラベサレス報告によれば、この時点では中国人 sinsay（後出）らから、襲撃がサングレイ（＝中国人）の海賊によるものであるとの注進を得ていた。

<sup>73</sup> ラベサレス報告では、lumanatlan と rraxa el vago とし、彼らを殺したことが現地首長たちの反発を生んだとしている。

<sup>74</sup> 他の3者はこの事件に触れない。

<sup>75</sup> ロアルカ、メンドーサは600人が上陸、うち200人が死亡したとする。パリ本は死者200人とするのみである。

<sup>76</sup> ロアルカは時期を特定せずに、オルテガとアルブルケケのチャレンジに触れるにとどまる。

<sup>77</sup> この指摘はマテオ・リッチライエズス会士に先行するものとして、ボクサー（『南中国』p.260）以来注目されてきてはいるが、一般に知られているとは言い難い。

ナ人の便船を見つけられずに失敗し、それを知ったメキシコ副王が長官ラベサレスに働きかけて渡航を実現するよう書簡を送ったことを述べる。林鳳の来襲の記述については、すでに注で他との異同について示したが、どちらかといえば、サン・アグスティンよりロアルカに近い。逆に言えば、この部分について、サン・アグスティンはラーダやロアルカ、そして影響力のあったメンドーサを利用した形跡がない。

第18章「リマホンが Dongaló に撤退するまでの出来事、パンガシナンに赴き、当地の王を名乗り、現地民がこれに臣従する」(pp.414-418)

マニラの騒乱のどさくさにまぎれてモーロ人がスペイン人の家を手当たり次第襲う光景を見た者は、これまで積み上げてきた植民事業もすべて台無しになったと観念したほどだったが、林鳳の側もシオコを含む主な将官4人が戦死しており、マニラから1レグア離れたドンガロ川地域<sup>78</sup>に撤退し、ついでパンガシナンに赴いた。人口も多く物資補給に好適なところに目をつけたのである。「スペイン人に勝利し、長官・野戦指令官を殺し、マニラを焼いた」と宣伝し、現地民を安撫することに成功し、川中の小島に町を築き、その中に兵600人を収容できる要塞や宮殿、寺院を作り、政府の機構も整え、イロコスー帯に新王国の誕生を告げ、スペイン人を殺した者には多くの褒賞を与えると宣伝した。

第19章「マニラで長官がとった処置と Francisco Saavedra がもたらした海賊リマホン情報。マニラ・トンド・ミンドロの現地民の蜂起と平定」(pp.419-423)

ラベサレスは市の再建に着手した。フェルナンディーナのスペイン人に連絡を取るべく送られたサアベドラは林鳳の動きを知り、諜報活動を展開しようとして失敗、何とか追っ手を振り切ってマニラに戻った。彼から敵情のあらましを知った長官は林鳳が蜂起勢力と手を結ぶ前にその掃討を図るべく種々の手を打った。その1つがサルセドに命じてマニラ一帯の有力者でスペイン人に反旗を翻していた Rajá Solimán と Lacandola (レガスピがマニラ市を建設した時に協定を結んだ首長3人のうちの2人)を招撫することであった<sup>79</sup>。サルセドはアウグスティノ会士マリン(前出)と相談のう

<sup>78</sup> ロアルカ、メンドーサはカビテとする。

<sup>79</sup> ラベサレス報告は、トンドの首長ラカンドラが他の首長と語らってスペイン人に敵対しようとし、すでにクリスチャンとなっていた者たちがトンドのアウグスティノ会の修道院におしかけ、修道士に危害を加えようとしたこと、しかし、中国人が撤退したのを見たラカンドラが一転恭

えで交渉にあたった。息子やおいがキリスト教の洗礼を受けているラカンドラはこれに応じ、交渉場所を設定した。マリンはそこに乗り込み、首長らを説得、ラカンドラをマニラの長官のもとに伺候させることに成功した。ラージャ・ソリマンもこれに続き、ようやくマニラ一帯は平穏となった<sup>80</sup>。ミンドロ島の首長たちもルソンの動きに呼応して立ち上がっており、アウグスティノ会の修道院が襲われ、院長のオルテガは囚われの身となっていたが、派遣された Gabriel de Ribera が平定に成功した<sup>81</sup>。

第20章「海賊リマホンに対する布石。野戦司令官、パンガシナンに赴き、陣を張る。船団の焼燬と要塞をめぐる攻防」(pp.425-430)

長官は神に感謝をささげるべく、翌75年1月2日に宗教行進を行った。再建成ったアウグスティノ会の教会では釈放されたオルテガが説教を行った<sup>82</sup>。マニラ市民200人を総動員して林鳳討伐に振り向けようとしたところに、カマリネス・パナイ・セブからの援軍が到着した。3月22日、遠征軍がマニラを出発した。スペイン兵は250(水主や輜重隊除く)、諸島から動員した友軍のインディオ1500(これに非戦闘員が加わる)<sup>83</sup>。態のいい人質としてラカンドラとその息子たちも随行させられた。また、「有能で善良な」華人の Sinsay<sup>84</sup> が随行し、ラーダも従軍神父として参加した<sup>85</sup>。マニラに残ったのは銃手100と傷病者30、水兵30、セブには兵20、イロコスには40人が残るだけであった。投入できるぎりぎりの線まで動員がかけられたのである。マニラが受けた

---

順の姿勢を示したことを記す。

<sup>80</sup> ラベサレス報告は、軍官たちが「首長を殺せ」と主張したのを押し切って彼らを許した理由として、食糧や弾薬用の硝石・硫黄などの供給(後者はメキシコから少量しか送られていなかった)を現地民に仰がざるを得ず、そのために首長たちを手なずけておく必要があったことを挙げている。これら現地民の具体的な動向について、他の3者は言及しない。

<sup>81</sup> 他の3者はルソン島以外の動きには言及しない。

<sup>82</sup> ラベサレス報告は、説教を行ったのはマリンだとする。

<sup>83</sup> ロアルカ、メンドーサはスペイン人250、友軍2500とする。パリ本は船59隻、スペイン人256、友軍2500とする。3者ともに進発は3月23日とする。ラベサレス報告はスペイン人300、友軍1500とする。

<sup>84</sup> すでに述べたように、ラベサレス報告では林鳳の正体の第一通報者として登場しているが、サン・アグスティンではこれが初登場である。ロアルカ、メンドーサでシンサイが登場するのは、王望高とスペイン人の出会いの場面である。パリ本は、遠征軍のマニラ進発の記述において「林鳳との戦いの全体に立ち会った商人」として紹介する。注59湯論文は「論夷賊捷音疏」に見える海澄県民林必秀をシンサイに同定する。従うべきである。

<sup>85</sup> ラベサレス報告も、同行者の中にラーダを数える。

ダメージは大きく、現地民の騒擾を抑えこみ、これだけの友軍を動員するのに4カ月以上を要した<sup>86</sup>。

一方、パンガシナンの林鳳は、当初スペイン人の圧政からの解放者として歓迎されたいが、現地民からの搾取により招かれざる存在となりつつあった。しかし、その兵力は2000、侮れない相手である。3月30日の早朝、船団がパンガシナン川に到着すると、陸路を前出のリベラが兵30をひきいて、水路をLorenzo ChaconとPedro de Chavesが兵80をひきいてそれぞれ進軍し<sup>87</sup>、林鳳の船団のほとんどが焼き払われた<sup>88</sup>。

第21章「戦いの続行、要塞攻撃に踏み切れず。チナから商人の服を着たカピタンAumónが海賊リマホンを追ってきて、到来の理由を説明する」(pp.431-436)

林鳳は翌日の来襲を恐れて防備を整えた。彼の側には1000丁の火縄銃があり<sup>89</sup>、スペイン側は軍事力で優位に立てなかった。そこで、サルセドは陣中にいた華人シンサイに林鳳宛に手紙を書かせた。シンサイは林鳳とは見ず知らずだったが同胞として、兵力を過大に示して威嚇しつつ(スペイン兵600、友軍10000、大砲40門<sup>90</sup>とする)投降を勧める。これに対する林鳳の返書は、和平に応じる条件としてスペイン人が先に兵を退くことを要求し、スペイン人の空威張りに対してはこれまでチナの10万の兵を破ってきたと切り返し、インディオは恐れるに足りない胸をさらして見せた。これに対して、サルセドは、林鳳を倒すか投降させない限り兵を退くことはないと決意を示し、交渉は決裂した<sup>91</sup>。

<sup>86</sup> バリ本は、遠征軍の始動の遅れの原因をここに求めている。

<sup>87</sup> ロアルカも同じである。メンドーサは、水陸それぞれを兵40とするが、おそらくロアルカを読み誤ったのだろう。バリ本は、リベラが率いたスペイン人30人のほかにインディオ100人を数え、水路を進んだ兵を100人とする。ラベサレス報告は水路を進んだ兵を60とする。なお、ラベサレス報告にはこの日の記述までしか残っていない。

<sup>88</sup> ロアルカとメンドーサは、この日の戦闘で敵側の100人以上を殺し、70人以上の女性を捕えたとしている。ラーダは、死者多数、捕虜女性70人とする。サン・アグスティンは数字を出さないかわりに、スペイン人が婦女の略取にかまけていたことが勝利を逃した原因とする。

<sup>89</sup> ロアルカは、後に逃亡した林鳳の秘書からの情報として、火薬70キントル、ベルソ砲と火縄銃あわせて1500丁を持っていたとする話を紹介している。同じ年に起きた長篠合戦の織田方の鉄砲数については諸説あるようだが(1000～3000)、それと比べても、性能は別として、かなりの数だと見てよからう。

<sup>90</sup> 実際には4門だった。

<sup>91</sup> これら3通の手紙のうち、ロアルカは最初の2通を引くが(メンドーサ、バリ本は引かない)、

戦闘は再開し、林鳳はスペイン人が陣地を移した際に、焼かれた船の廃材を回収して新たな船の建造に当てた。一方、長官が派遣した Amador de Arriarán がマニラに戻る際に林鳳を追ってきたカピタンの Pezung Aumón<sup>92</sup>（把総の王望高）に遭遇した。皇帝の命を体して福建の副王（巡撫）が派遣した3人の軍官の1人であった。彼には林鳳が投降した場合の赦免状も託されていた。王望高は商人に変装して<sup>93</sup> 林鳳と会見して内部の切り崩し工作、場合によってはその暗殺を目論んでいたが、思っていたより林鳳が窮境にあるのを知り、ひとまず本国に報告に赴くことにして、その前にマニラに行き長官と会見した。一方、林鳳は8月3日に義子 Asia<sup>94</sup> の先導でまんまと海上に脱出した。サルセドは空っぽの要塞の出来栄えに舌を巻いたがこれを焼き、兵100をひき

---

サン・アグスティンとは異同がある。シンサイの手紙の、虚勢を張って兵砲の数を水増ししたところでは、サン・アグスティンの600人、40門が、ロアルカでは800人、80門となっている（なお、インディオの数が1000となっているのは1万の誤りだろう）。林鳳は返書の中で、スペイン側が条件を容れた場合にマニラに船で赴くと述べるが、その船数が、サン・アグスティンは数隻、ロアルカは3、4隻である。なお、シンサイが「マニラでスペイン人が中国人を厚遇していることはこのパイロット（林鳳をマニラに導いた者）に聞けばわかる」として、敵側にいる中国人のことを知っているのが興味深い。以後、シンサイはもっとも内情に通じたチナ人としてスペイン人に当てにされる一方で、後述するように漳州でも名の通った人物だった。

<sup>92</sup> サン・アグスティンは、この後も一貫して彼をこう表現する。しかし、後述するように、王が把総となったのは、帰還後のことである。また、福建の副王が派遣したとするが、他の3者は泉州の長官としている。王望高は前掲の「論夷剿賊捷音疏」によれば三月十二日（4月22日）に呂宋国に到ったとするが、これは後述のロアルカの記述と合わない。また同疏によれば王を「活嶼水寨哨官」としている。

ロアルカでは、このあたりの叙述が前後して読みにくい。それを整理すると、パンガシナンからマニラに使者として向かった Ramirez が陣中に向かうラーダとアルブルケルケに会い、2人のうち、1人が管区会議に向かったとする。この1人がラーダで、彼はロアルカの船に乗ってマニラに戻る途中に、王望高（Oumoncon）と出会ったということになる（メンドーサはラミレスには言及しないが、やはりラーダがロアルカの船に乗っていたとする）。そして、王望高がパンガシナンでサルセドに会った後、チャベスとともに4月8日にマニラに着いたとする。サルセドがパンガシナンに着いたのが3月30日であるから、一連の出来事は短時日のうちに起っている。パリ本とサン・アグスティンは、王望高とラーダの出会いに触れない。

<sup>93</sup> 他の3者は変装のことは述べないが、基づくところがなければわざわざこう書かないだろう。シンサイの存在を見ても分かるように、こうした交渉における商人の介在はおそらく珍しいものではなく、また、商人と軍官は後述するように「変換可能」なので、この「変装」もそれを表した事象ととらえることもできそうである。

<sup>94</sup> ロアルカでは、疑心暗鬼にかられて味方を殺し始めた林鳳の心のよりどころとして登場する。ついで、戦線が膠着して、サルセドが再び林鳳と平和の道を探った時の交渉者として出てくる。メンドーサとパリ本には登場しない。



いて追尾したが、空振りに終わった<sup>95</sup>。

第22章「第3回管区会議で新管区長にアロンソ・デ・アルバラードを選出。マルティン・デ・ラーダとヘロニモ・マリンのチナ旅行、政庁が彼らに与えた指示と書簡」(pp.437-443)

著者はここで時間を巻き戻し、ラーダの管区長としての任期が満了したので、後任を選ぶべく4月30日にマニラ<sup>96</sup>で管区会議が開催されたことを記す。人事、修道院建設についての取り決めのほかに、王望高の帰国に際して、林鳳の要塞に残されていた捕虜、とくに中国沿海でかどわかされた女性の釈放と送還を彼に託すべく、ラベサレスに働きかけることになった。長官はこれに応じ、すでに奴隷として転売されていた者については身銭を切って買戻し、計52人を集めた<sup>97</sup>。王望高が好意に報いるべく使節を連れてゆくことを申し出ると<sup>98</sup>、大陸布教を構想していたラベサレスは喜んでこれを受け入れ、管区長に使者2人の選出を依頼し、結果選ばれたのがラーダとマリンであった<sup>99</sup>。長官は随行者としてエンコメンデーロのロアルカと Pedro de Sarmiento をつけることにした。宣教師が首尾よく残留できた場合に、報告に戻る者が必要だったからである。そして、出航前に一行に次のような指示を与えた(6月2日付)。

1, チナ、別名 Taybin (大明) の地についたらすぐに Chincheo<sup>100</sup> に赴き、当地の長官に私の書簡を渡し、そこから Fokien (福建) 省の副王 (巡撫) がいる Hoccu (福州) に向かい、副王に王宛の書簡を託すこと。長官、副王へのプレゼントはそれぞれの地で渡し、贈り手がフェリペ2世の名代でフィリピンの長官になっている者であること、王の強大な力を相手方にわからせ、チナ王との友好関係を結ぶために使節を派遣したとの意図を伝えること。

2, 上のような意図を知らせたうえで、全世界の民が唯一の真の神を知り、その教えを理解し守ることを王が期待していると述べ、その趣旨のもと宣教師を各地に派遣し

<sup>95</sup> ロアルカはサルセドの追跡行をかなり詳しく記している。

<sup>96</sup> メリーノは、トンドが正しいとしている (p.437)。

<sup>97</sup> ロアルカ、メンドーサは捕虜送還に言及するが、人数は記さない。パリ本は同じく52人とする。

<sup>98</sup> 他の3者は、王望高の申し出に対して、長官が捕虜送還でこの好意に応えたとする。

<sup>99</sup> メンドーサは、最初管区長自身が志願したとする。

<sup>100</sup> パリ本以外は、漳州と泉州を区別することなく同じ表記で示している。この場合は、後述するように泉州を指す。

ていることを知らせ、この地にも宣教師の入国を認めてほしいと伝える。

3, 副王や長官に我々の商船が安全に出入りできるような港をポルトガル人のように提供してくれるよう求める。

4, 土地の人々の性質や風習、彼らが約束を守る信頼に値する人間かどうか、そして交易可能な商品は何か、その他、土地の秘密 (secretos de la terra) についてできる限り探り出すこと。残留することになった場合は、以上のことについて長文の完全な報告 (larga y entera relación) をロアルカとサルミエントに託し、残留がかなわなかった時は自ら持参すること。

5, 副王が「これらの交渉は自らの権限外にあり、使者が北京の宮廷に直接赴いて交渉すべきである」と言う場合は、「その用意はしてきていないので、あらためて王に献ずるにふさわしい品を持った使節を送ることができるように指示をいただきたい」と答え、ラーダらはそのまま当地に残って王の返事を待ち、それについて、ロアルカからは帰還して報告すること。

6, 同行者とくにロアルカとサルミエントの2人はチナ人の持ち物や示されたものに対して感嘆したり、軽蔑したりしないこと、ましてや彼らの偶像について戯言を弄したり、儀式について笑ったりしないこと、これらの行為はチナ人の勸にさわると言われているからである。

7, スペイン人はチナ人の女性と接触しないこと。接触すればさまざまな不都合が生じるからである。

8, スペイン人とその使用人は夜間に路上をうろつきまわらないこと<sup>101</sup>。

9, バンガシナンでロアルカに金100テールを支給し、一行の道中費用に充てること。現地人に物乞いせず、代金を支払うことで、スペイン人とは商売が成り立つことを示すため<sup>102</sup>。

これについて、ラベサレスが「チナ王」宛に書いた手紙が引用される。翻訳者は例のシンサイである。カステイーリャ王からは、チナ王に反く海賊がいたならそれと戦うように命じられていること、フィリピンに交易に来るチナの臣民やフィリピン在住

<sup>101</sup> 後に見るように、この禁令は実際には破られている。

<sup>102</sup> バリ本、ロアルカは箇条書きにせず、一部にのみ言及する。メンドーサにはない。

のチナ人を厚遇し、我々の到来前に現地人がチナ人に働いていたような狼藉を防いでいること、捕虜になった者を買戻して故国に送り返した数が80人に達していることなど、これまでスペイン人がいかにチナとの友好を重んじていたかをアピールした後、林鳳の来襲以降の状況についてかなり具体的に描写する。そして、王望高とともにラーダらを福州（Ucheo）に派遣すること、2か月以内にリマホンを捕えるか殺すかできるだろうと予告する（6月10日付）。

面白いのは、中国人との友好に努めてきたのにそれを裏切られるとは意外だったとして、マニラの防備の薄さ（当時、兵が30人しかおらず、要塞もなかった）ということ。「正直に」言ってしまうことである。これは、後のフィリピン長官が豊臣秀吉の恫喝に対して弱みを見せまいとした態度と好対照をなしている。

この手紙はロアルカにも載るが（メンドーサにはない）、大きな異同があり、具体的には注に示した<sup>103</sup>。フォルクはこの点について、サン・アグスティンはロアルカを用いず、公的な文庫所蔵のものを使ったのだろうというのみだが、ここまでの違いが生じ

<sup>103</sup> 第1次攻撃で上陸した数を、サン・アグスティンは600とするが、ロアルカではこの数字がない。サン・アグスティンが述べる林鳳側の損害、撤退について、ロアルカは鐘を鳴らして召集をかけ、カピタに撤退したと述べるのみである。第2次攻撃の敵の船数をロアルカは大小あわせて170隻（上掲のようにフィリピン来襲時の船数は60～70隻（navios）と記されているが、それ以外にも小船（barcos）100隻が存していたことになる）とするが、サン・アグスティンは曖昧に「多くの人」とするだけである。サン・アグスティンはこの時のスペイン人死者4人、市街の多くの建物が焼けたとするが、ロアルカにはこれらの記述はない。林鳳がパンガシナンに撤退して態勢を立て直したことやサルセドとの攻防について、サン・アグスティンは具体的に詳しく記したのちに、戦況報告の使者である軍官（シンサイが同行）がマニラに向かう途中、王望高に出くわしたとするが、ロアルカでは、林鳳がパンガシナンに逃げ込んだと簡単に述べ、王望高と会ったのはシンサイとして軍官に触れない。サン・アグスティンは、兵糧攻めの策を取ったのは王望高の意見によったとするが、ロアルカにはそうした記述はない。ロアルカはサルセドと林鳳の交渉や、敵から内通者が出たことに触れるが、サン・アグスティンにはない。サン・アグスティンは王望高が包囲戦に参加したことを記すが、ロアルカにはない。ロアルカが、王望高とともに「2人の神父と2人のカステリーヤ人をUcheo（福州）のConbun（軍門）のもとに派遣する」とするのに対し、サン・アグスティンは派遣される4人の具体名を挙げ、派遣先を「福建の副王と長官たち」とする。なお、パリ本は手紙そのものを引用せずに簡約した形で載せているが、戦いの経緯には触れず、買戻した捕虜の数を具体的に述べない。サン・アグスティンやロアルカが濃淡はあるにせよ、マニラ・パンガシナンでの攻防を具体的に記すのに対し、一切そうした記述はないが、トンド在住の中国人から林鳳の情報を入手したことは他には見えない。

ることへの説明にはなっていない<sup>104</sup>。

第23章「博士ドン・フランシスコ・デ・サンデが長官・総司令官・巡察使として着任。神父たちがチナから帰還」(pp.445-450)

ここで使節行を飛ばして、事後の話に移る。新長官サンデは8月24日にマニラに到着した。彼はラバサレスから任務を引き継ぐと、諸方面に十分に配慮した政治を行い、支持を得たという<sup>105</sup>。ラーダとマリンは中国から10月28日に帰還した。彼らには王望高、カピタンに昇格した Sinsay に加えて、Siahoya-Xiaguac の3人(後述)の軍官が随行していた。彼らは林鳳が逃亡したことを知ると(マニラに到着するかなり前から知っていたと付記する)遺憾の意を示したが、スペイン人側は歓待にこれ努めた。しかし、長官は彼らがもたらしたプレゼントが前任者宛だったことに気分を大層損ねたという。また、中国側からの返書は(表題を“Carta del Rey de Taybin, de la provincia de Fokien, de la Casa Real”<sup>106</sup>とするが、実際には北京からの返事でも巡撫の手紙でもなく、泉州の長官の手紙である<sup>107</sup>)、「チナ人もスペイン人も同じ天下にある」と書き出し、そのために3年ごとに福建に友朋としてやってくる琉球人(Lequios)同様に、スペイン人も友として扱うと述べる。林鳳とその一党を追うべく派遣された王望高とスペイン人が連合してあと一步までおいつめたところで<sup>108</sup>神父らとともに帰還したと

<sup>104</sup> Dolors Folch, “Biografía de Fray Martín de Rada,” in *Huarte de San Juan : Geografía e Historia*, 15, 2008 p.53. このようになかなりの違いがあることからすると、両者に共通の祖本があったのではなく、漢文にすでに翻訳されたものからあらためてスペイン語にそれぞれ訳しなおしたものを使ったのかもしれない。

<sup>105</sup> この後、彼は官僚からも修道会からも厳しい批判を被ることになるが、フィリピンの外から送り込まれた初めての長官として、当初は諸方面に配慮せざるを得なかったのだろう。

<sup>106</sup> ロアルカはこの手紙と次の手紙を第1部の末尾(第10章)に配し、前者の差出人を Inzanton(後述) = 泉州の長官としている。サン・アグスティンのタイトルを見ても、送り手が誰なのか、タイビン(大明)の王、福建省、王家がどのような関係にあるのか判然としないが、翻訳の不備から来たものだろう。

<sup>107</sup> 文面の中に「3人のカピタンと私が泉州で一行を歓待した」「神父たちを軍門に会わせた」などの記述があるところから、手紙の送り手は泉州の長官だとわかる。

<sup>108</sup> 『万曆武功録』巻3「林鳳伝」には、王望高らが呂宋に赴き、「番兵五千を招いて港内(玳瑁港 ≡ パンガシナン)を襲い、鳳の舟をほとんど焼き尽くした」として、王望高が主体的に動いたように記している。この記述の源流は前掲の湯開建論文が引く上疏にある。湯はこれにもとづいて、王が対林鳳の軍事作戦に参加したとする。王の功績申告が虚偽であるなら、同行者がこれを告発しないはずがないというのが主な根拠である。一方、スペイン語史料がこの点につい

し、帰島の時には3人の軍官を派遣するので協力して林鳳をとらえるよう言い、それに失敗した場合は Xiaguac をいったん帰らせて兵を増強して再派遣すること、首尾よくゆけば自分から軍門（巡撫）に、軍門から王に報告がなされ、スペイン人に交易を許可する王令が得られるであろうことなどを述べ、派遣した10隻の船に乗せた将兵には10か月分の給与を与え、現地民に決して不当な物資調達を行わず、違反者は厳罰に処するとしている。日付は万暦三年八月（el tercero año del Rey Lion Huicbanlic<sup>109</sup>, en octavo mes）とある。

もう1通のタイトルは「福州（Hogchiu）の巡撫（Virrey）、総兵（Capitán General）、布政使（Tesorero）から長官グイド・ラベサレス宛」であるが、「神父たちの処置をめぐる副王の命令で福建の長官たちが集められた時に書かれたもので、もとの文言の中に Virrey（副王）を3人称で呼んでいるところがある」と解説される。内容は上の手紙とほぼ同じだが、1行のうち主だったものを6人ととらえていること（2人の神父、ロアルカ、サルミエントに加えて、後に一行に加わったクエンカとトリアナを指すのだろう）、各人に日々の食料代として銀1両半を与えたこと、王の返事が戻ってくるには往復6か月は必要なことを述べるのが違いである。日付は前の手紙の1カ月前の「七月」である（「8月に相当する」との注釈つき）<sup>110</sup>。2通の書簡は大きな深紅の紙（papel carmesi）に書かれたという。そして章末に、如上の使節行の顛末についてはラーダが記録を残しているの、「誤解をまねくような数語を除いてまったく変更を加えず引用

---

て黙して語らないのは、王望高に腹を立てていた長官サンデが彼の功績を黙殺したからであるとする（pp.57-59）が、注103で見たようにサン・アグスティン所引のラベサレス書簡には、王望高の参戦を示す記述が見られる。しかし、突如現れた王望高が「番酋の支持とともに5000の番兵を集め、三月十八日（4月28日）から二十八日にかけて林鳳を攻撃した」とは考えられない。激しい戦闘があったのはサルセドがパンガシナンに到着した3月末から4月初にかけてのことであるし、ロアルカが王望高がパンガシナンを去って4月8日にマニラに到着したと述べていることとも矛盾する。その後には王はパンガシナンに戻って、サルセドから捕虜の受け取りを行うが、前述したように、この頃には戦線は膠着していた。やはり王の報告に信を置くことはできないだろう。

<sup>109</sup>banlic（万暦）の前の Lion Huic（ロアルカでは gong hui）は、おそらく三年の干支「乙亥」の訛であろう。

<sup>110</sup>前の「八月」は西暦では9月4日～10月3日に当たり、後者の「七月」は8月6日～9月3日に当たる。前者は「泉州の長官」が一行の出航前に手交したものであり、後者は福州を去るにあたって与えられたものであろう。

する (sin más mutación que la de algunas palabras algo confuses)」とする。

\*

\*

\*

以上、ラーダらの中国行の記述の前におかれたサン・アグスティンの記述を紹介しながら、ロアルカ、メンドーサ、ラーダとの比較をしてきた。まず指摘すべきは、サン・アグスティンの筆致のクールさである。林鳳の襲撃で教会を焼かれ、蜂起した現地民に裏切られる形で会士が捕えられ、そして王望高との出会いの当初からラーダが関与する(ロアルカ、メンドーサによれば)など、一連の事件へのアウグスティノ会のかかわりはかなり深いものがあるのに、ことさらに意味づけを行うことがない(たとえば、林鳳の上陸部隊の不時着を「神風」に帰するラーダ、メンドーサと対照的である)。こうした特徴が、拠った史料によるものなのか、史家と事件との距離感に起因するのかわからない。

次に、事件に際しての現地民の動向とスペイン人のそれへの対処に触れるなど、サン・アグスティンのほうが他の3者よりフォーカスが広く、事件を多方向から描こうとする。中国行が主題である3者と違い、こちらは初期植民史全体がテーマなのだから当然といえば当然なのだが、中国行のみ(とくに彼らによる中国文化の観察)を特化して注視しがちな偏向を、このテキストは中和してくれる。以上の諸テキストの比較を踏まえて、今度は中国行の部分を見てゆこう。

### 3、ラーダの中国行

前述したように、ボクサーは、サン・アグスティンが「ラーダを忠実に襲っている」と見て、『南中国』にこれを採用した。確かに、サン・アグスティンとパリ本を比べてゆくと、途中までは近似している。固有名詞の表記<sup>111</sup>や文章構成・使用単語<sup>112</sup>に違い

<sup>111</sup>パリ本が王望高を Homonco とするのに対し、サン・アグスティンは Aumón で通しているのはこれまでの叙述に合わせた処置である。しかし、その他にも、中左所をパリ本が tionçoçóu としているのに対し、サン・アグスティンは Tiongzozou としているなどの違いがある。

<sup>112</sup>サン・アグスティンはラーダの1人称単数(yo)と複数で書かれている。パリ本は1人称複数のみで、ラーダも名前で示し、一見するとラーダが執筆したものとはわからないが、ロアルカの記述との比較から見てこれがラーダのものであることは動かない。

があるし、文言の出入もあるが、マニラ出発直後の部分を除けば<sup>113</sup>、ざっくり同じ内容であると言えなくはない<sup>114</sup>。ところが、一行が福州に到着したあたりから、両者は大きく異なってくるのである。その部分を紹介する前に、サン・アグスティンによって彼らの行程をおさらいするが（以下、単に「サン・アグスティン」としているところはパリ本も同じであることを示し、記述に違いがある時だけ「パリ本」とする）、やはりロアルカ、メンドーサとの比較を行う。なお、ロアルカでは第4章「諸島からチナ王国への出発」、5章「Chincheo（漳州）湾入りの際の出来事」、6章「Tontuso（中左所）到着から Chincheo（泉州）<sup>115</sup>への出発まで」、7章「中左所から Insancton（Inzancton）に会うため泉州へ向かう」、8章「ynzanton との会見」、9章「副王に会うため、泉州から福州へ向かう」、メンドーサでは第2部第10章～第21章まで（日本語訳 pp. 283-338）にあたる<sup>116</sup>。あらかじめ言っておくと、この旅行記の部分は、圧倒的にメンドーサが詳しい。それに比べてロアルカは散文的に映るが、やはり両者の叙述の構造は似通っている。それに対して、サン・アグスティンとパリ本も同じ行程について述べているわけだからむしろ前二者と共通するところもあるのだが、ナラティブは別のものとみてよい。また、前述したように、この部分については、ボクサーが言及し、ロドリゲスの編著にも載せるマドリッド本が存在する。上記4者に比して、内容は簡略しかも途中で切れていることもあって、『南中国』はこのテキストに触れることが少ないが、必要に応じて言及することにする（ロドリゲスの転写を使った）。

1575年6月12日<sup>117</sup>にラーダ一行は現地の船<sup>118</sup>でマニラを発った。あとに残ったシンサイが中国に送還する捕虜を別の商船に載せて後を追った。8日後にパンガシナンから7レグアの距離にあるポリナオに到着すると<sup>119</sup>、彼らの船より性能がよい船に乗って

<sup>113</sup>たとえば、パリ本には、シンサイについて、「戦争のすべてに立ち会っていた」と説明する部分や、サルミアントをパンガシナンに派遣したくだりがあるが、サン・アグスティンにはない。

<sup>114</sup>しかし、見逃せない違いはあるので、それについては注記しておく。

<sup>115</sup>ロアルカは漳州・泉州をいずれも Chincheo と表記する。

<sup>116</sup>『南中国』の注記の中でロアルカを時に引用することもあるが（pp.246,248,251,253,254,257（こ  
こまで第1部）、264,269,273,277,279,289,306）、ボクサーは両記録の第1部のテキストの比較には  
余り関心がないようである。

<sup>117</sup>メンドーサは6月12日、日曜日とする。

<sup>118</sup>ロアルカはマニラにいたチナ商船とする。

<sup>119</sup>ロアルカ、メンドーサは日にちを示さず、日曜日とする。

いたシンサイが先着しており、この間にパンガシナンに出向いてサルセドの兵士に掛け売りしてした商品の代金を回収していた<sup>120</sup>。一行はパンガシナンに向かおうとするが逆風に会い、いったんポリナオに戻った<sup>121</sup>。その後、ラーダが旅行に随行する通訳<sup>122</sup>と王望高の船を求めに行き（7、8月は往々にして風が強くなるため、現地船では航海困難と判断）、王の2船のうち小さいほうを選んでポリナオに戻り<sup>123</sup>、その船で6月26日<sup>124</sup>に中国に向けて出発した<sup>125</sup>。なお、ロアルカは出発の手前まで述べてきて林鳳のそ

<sup>120</sup> 商売の話はロアルカ、メンドーサにはない。ロアルカ、メンドーサでは、この船にパンガシナンからスペイン人が2人乗りこんだことを記す。彼らは一行をサルセドのもとに連れてくるよう命じられていたのだが、サン・アグスティンには登場しないので、なぜ一行がパンガシナンに向かったのかが分かりにくくなっている。

<sup>121</sup> ロアルカ、メンドーサは、一行がサルセドに足止めされるのではないかと恐れてパンガシナン行きに逡巡があったとし、ポリナオに戻った後にサルミエントがあらためて派遣され、結局サルセドの要請でラーダがパンガシナンに向かい、サルセドの部下 Nicolas de Cuenca が商売のために一行についてゆくことになったことなどを記す。こうした経緯がサン・アグスティンには述べられていないので、不得要領な記述になっている。ちなみに、パリ本にはサルミエントの派遣について記す点でサン・アグスティンと異なるが、話が分かりにくいのは同じである。また、ロアルカとメンドーサはサルセドが副王と泉州長官あての手紙を託したことを記す。

ロアルカはさらに、ラーダらがパンガシナンに行っている間に王望高が長官に宛てて書いた手紙を引用するが、これは他には見えない。手紙でラベザリスを Capitan Vaçar (Baçar) と呼ぶのは、漢文を翻訳した結果である。内容はフィリピンでの厚遇、捕虜の送還に謝意を表したもののだが、王望高が引き連れてきた2隻以外の「商人の第3船」が許可なく (sin licencia) 硝石を輸出し、フィリピンでもこれを商い、入手した商品を日本に持ち込もうとしていたという記述が目を引く。この船は王望高に見つかると、禁制品を海に投じたが、サルセドが間に入って商人の処罰を軽減してほしいと言ったという。ラベサレスのもと、カガヤンを中国や日本との交易基地にしようとしていたサルセドらしい動きである。王望高はその顛末には触れずに話柄を捕虜釈放に転じるので、文脈をたどりにくい。サルセドの仲介を認め、恩を売っておこうとしたものであろうか。

<sup>122</sup> メンドーサは、ここでエルナンドを「マニラで洗礼を受け、スペイン語をよく知るチナ人の若者」と紹介する。

<sup>123</sup> これを読むと、2船のうちラーダが好きな方を選択したように見えるが、ロアルカによれば、大きな船のほうはサルセドが河口封鎖に使うために押さえられていたのである。

<sup>124</sup> 7月26日と誤っている。パリ本、ロアルカ、メンドーサはさらに日曜日とする。

<sup>125</sup> ロアルカとメンドーサは、ここでもう1人の兵士 Juan de Triana の参加を記す。一行は以上6人に加えて、下働きのピンタードス諸島のインディオ、クリスチャンのインディオで通訳のエルナンド（前述のようにサルセドのところから連れてこられた）の総勢20人、これに送還される捕虜や王望高とその部下が乗船した。ロアルカは、この時点においても王望高の正体をスペイン人がつかみ切っておらず、実は林鳳の一味であり、スペイン人の手を逃れるために国王の手の者と偽っていると見ていた者がいることを伝えるが、サン・アグスティンとメンドーサ



の後に話題を転じ、使節行を次章まわしにする点でメンドーサと違うが<sup>126</sup>、両者のナラティブが大きく異なるのはここだけである。

7月5日（火曜日）に Tiongzozou（中左所）に入港するが<sup>127</sup>、その前に商船によってスペイン人の到来は当局の知るところとなっていた。Chinchiu（漳州）<sup>128</sup>の長官は林鳳に打撃を与えたのが自分の配下でなく、スペイン人なのをいまいまいしく思い<sup>129</sup>、一行の中に当地出身のシンサイがいることを知り、その息子を人質に取ったうえで、船6隻を派遣してシンサイを捕えようとした。それより前に港を警備する船団12隻<sup>130</sup>が一行に近づいて接触、事情を報告する使者を泉州の長官に送っていた。そこに6隻の船団が近づき、シンサイの身柄をめぐる両船団の間で一悶着が起きたが、幸い大事には

---

にはこうした記述はない。

出発以後の航海について、サン・アグスティンには、中国人たちが神父に遠慮して偶像に航海の無事を祈らなかったことくらいしか述べない。ロアルカ、メンドーサは中国人の航海術の稚拙、船中での厚遇、陸地への接近などを詳しく語り、ボリナオから到着地までの距離を140レグアとする。両者の相違は、ロアルカがチナ人は「海図も測量器具も持っていない」とするのに対し、メンドーサが「海図はないが、航路図は用いる」としている点（ラーダの第2部に「彼らの航海図を入手した」とある。『南中国』p.261）、ロアルカが船団でナンバー2の位置にあったシンサイの存在が一行の厚遇の原因だったとするのに対し、メンドーサはシンサイの存在と厚遇を結び付けていない点、ロアルカがポルトガルの海図により漳州、ボリナオの緯度（24度、16度）を確認している点である。マドリッド本には、漳州の緯度を24度、ボリナオを17度とする。漳州の緯度はほぼ正確で、ポルトガルの海図の正確さをうかがわせる。

<sup>126</sup> メンドーサは、林鳳のその後には軽く触れるのみである。彼にとって関心を引く事柄ではないからである。

<sup>127</sup> ロアルカとメンドーサは、中左所の手前にある1万の守備兵を擁する衛所としてそれぞれ tituihuic, Tituhul に言及する。矢沢利彦はこれを鎮海衛に比定する（p.291）。ラーダは第2部でこのまちを Tinhayue と呼んでおり（『南中国』p.269）、鎮海衛であることはまちがいない。何高済の漢訳が中左所とするのはおかしい（p.183）。

サン・アグスティンは地名には触れず、中国到着を「次の日曜日」（＝7月3日）とし、ロアルカは日を示さず、メンドーサは「7月3日、日曜日」とする。

中左所をパリ本は tionçoçóu, ロアルカは tontuso (Tonsuso), メンドーサは Tansuso とする。なお、マドリッド本は中左所入港を7月8日とする。

<sup>128</sup> 漳州と泉州を同じ表記で記す。前述したように、ロアルカ、メンドーサも双方を Chincheo として区別しない。パリ本のみが、漳州を Chionchui, 泉州を Chuynchui として両者を区別し、ここでは前者としている。

<sup>129</sup> パリ本は、「泉州の長官の手の者が林鳳を発見したことに腹を立てた」とする。これは王望高を指す。

<sup>130</sup> ロアルカとメンドーサは7隻とする。

至らなかったという。

しかし、この記述ではなぜシンサイに目がつけられ、彼をめぐる争奪戦が発生したのかが見えてこない。ロアルカとメンドーサにはこのトラブルについての描写があり、ようやく事態を理解できるのである<sup>131</sup>。

ついで、河口より3レグア遡上したところにある中左所（王望高の出身地とする）の町に到着する手前で、Inzuanto（泉州の長官）<sup>132</sup>から派遣されたそれぞれ「配下に

<sup>131</sup> ロアルカの叙述に従えば、この湾の司令官（el general de aquella baya）と王望高の会見→神父たちが司令官の船に移るがまもなく甲板下に押し込められる→船上での戦闘→（トラブル発生について話を過去に戻す）→Chincheoの長官による王望高とシンサイの父の派遣、後者の遭難→「一行がパンガシナンに乗っていく筈だった船」（ボリナオから出航して一度吹き戻された船を指すのだろう）が出帆してChincheoに着き、「彼の長官」に事態を通報→長官が6隻を派遣して待ち受け、シンサイの身柄確保を図る。彼が派遣したシンサイの父親ないしその子の手柄を自分の手柄だとみなして、それが王望高に奪われるのを阻止しようとした→司令官とスペイン人が話していた時に6隻が近づく→戦闘、ということになる。

メンドーサも途中で過去に話を戻すという叙述の順序をとっており、ロアルカを下敷きにしていることは明らかである。サン・アグスティンはこの部分を全く欠いているために、話が見えなくなってしまっている。

しかし、ロアルカとメンドーサには見逃せない違いもある。ロアルカは王望高を派遣した el gobernador de Chincheo を湾の中にいたのと同一人物（que era el mismo que estaba dentro de la ensenada）としている（これは既出の「湾の司令官」を指すとおぼしいが、general と gobernador が同じというのはいぶかしいし、実際後の記述を見ると違っている）。一方、メンドーサは el gobernador と el general de la ensenada を別人とし、前者が王望高を、後者がシンサイの父をそれぞれ派遣したとするのである。文脈からすれば、メンドーサの方が理にかなっている。矢沢はメンドーサの延長線上でChincheoのgobernadorを泉州のゴベルナドール（興泉道）、general de la ensenadaを漳州知府と解釈して、後者を「湾の司令官」とは別人とする。そして、泉州出身の王望高を派遣した泉州側と、シンサイの父を派遣した漳州側の対立が、このトラブルを引き起こしたとしている（pp.295,298）。メンドーサは、彼の故郷を「鎮海衛から2レグア離れたところ」とするだけだが、ロアルカとサン・アグスティンは彼の出身地は中左所としており、「泉州つながり」ではないが、矢沢がこれを漳州・泉州の争いと見たこと自体は正しい（後述）。

ほかにも、ロアルカとメンドーサには違いがある。ロアルカではシンサイの父が遭難後どうなったのかを記さないが、メンドーサは、シンサイを奪いに来た側の船に父が乗り組んでいたとしている。ロアルカは一行に先行した船が3日前に先着していたとするのに対し、メンドーサは10日前とする。

<sup>132</sup> ロアルカはここで「長官はInzantonと呼ばれる」と解説し、メンドーサはInsuantoとする。バリ本はここでは泉州の長官とするだけだが、後ではInquantoとする。マドリッド本はInquantonである。George Phillips, "Early Spanish Trade with Chin Cheo (Chang Chow)," in *The China Review*, 19, 1891, p.247 はメンドーサのInsuantoを分巡道の訛としたが、これに対し

1000 人の兵を擁すると言われる」<sup>133</sup> 人の軍官<sup>134</sup> が出迎えに現れ<sup>135</sup>、そのうちの yan lautia はこの後、彼らの旅行の間常に随行することになったという<sup>136</sup>。上陸した一行には輿ついで馬が提供されたが、これを断って徒歩で宿舎に入った<sup>137</sup>。ここで道中の接待の周到さについて述べられ、それを受ける側の一行の顔ぶれ（ロアルカ、メンドーサでは登場済みのクエンカ、トリアナ、通訳のエルナンド<sup>138</sup>、そして 12 人のインディオ<sup>139</sup>）が紹介される。

翌日、訪問してきた Lau lotia はスペイン人たちの肩にストールのように絹布をかけて儀式を行い、同じことを王望高やシンサイにも行った<sup>140</sup>。シンサイまで恩典にあず

---

て E.H.Parker は音が違うとして（「分巡」は廈門方言では pun-sun,pun-un とする）興泉道であるとし（ibid.,p.324）、さらにフィリップスがこれに対して、“Is the Chincheo of Mendoza Chinchew or Changchow?” in *The China Review* 20,1892,p.26 で、メンドーサが官僚の名称を一般的に記した箇所でも Insuanto に言及しているところから、特定の都市名を帯びた興泉道には当たらないとして、やはり分巡道であると反論した。その後、ボクサーは興泉道とし、日本語訳・漢訳もそれに従っている。音で言えば、各テキストが泉州を Chincheo ないし Chinchiu,Chuyinchin と表記しているのと zan,suan,quan にも隔たりがある。いずれにせよ、万暦『大明会典』卷 128 督撫兵備に「興泉兵備一員、駐筭泉州、分巡興泉道、兼分理軍務」とあるように、福建では興泉道=分巡道である。以後この語が出た場合は多数派に従って「興泉道」としておく。前掲「論夷剿賊捷音疏」では、興泉兵備参議喬懋が王望高らを哨探に派したと述べる。

なお、フィリップスとパーカーの応酬の主題はここにはなく、前者の論文の表題が示すように、チンチェオが漳州をさすのかそれとも泉州を指すのかということにあった。しかし、すでにみたように、一連のテキストでは漳州と泉州を同じ表記で示しているため、ケースバイケースで判断するしかない。

<sup>133</sup> 千戸である。

<sup>134</sup> ロアルカは、「町のカピタンまたはコレヒドールと泉州の長官が派した他の 3 カピタン」とする。メンドーサが「泉州の長官が派したカピタンと 3 人の随従」とするのは、おそらくロアルカを読み誤ったものだろう。

<sup>135</sup> 軍全体が迎えに出たとしてその数を 5000 とする。また、後のところで、住民の数を 3000 とする。ロアルカ、メンドーサは住民 4000、兵 1000 とする。

<sup>136</sup> Yan という名はロアルカ、メンドーサには出てこないが、かわりに老爹（ロアルカ lautia、メンドーサ loytia）という語の解説（ロアルカ「庶民とちがう標章を身に着けた官人」、メンドーサ「スペイン人の間の騎士に相当」）を付す。

<sup>137</sup> ロアルカ、メンドーサは単に宿舎に案内されたとするだけである。

<sup>138</sup> バリ本は hernando de tang とする。前掲「論夷剿賊捷音疏」には、番僧二名、番使四名の名前とともに通事一名陳輝然を記す。また一団を計 20 名とする。

<sup>139</sup> 合計すると 19 人になる。ロアルカ、メンドーサは 20 人とする。

<sup>140</sup> ロアルカ、メンドーサは訪問者を「船 40 隻の司令官」とし、詳細にこの場面を記し、あわせ

かったのは彼が商人ながら当地で重んじられていることに加えて、パンガシナンで林鳳との交渉役にあたるなどこの問題に通じているためだとしている<sup>141</sup>。次の日、一行は王望高とともに中左所を出発し、Tangua（同安）<sup>142</sup>へと向かった。道中の町の多さに驚嘆の目を見張り、これは福建だけのことではなく、広東を除く中国全土がそうなのだと聞き、世界でもっとも人口密度の高いところだと評する<sup>143</sup>。このようにサン・アグスティンは個別的な記述から一般論に話をもっていく傾向が強い。

同安に着くと<sup>144</sup>、当地の Ticon<sup>145</sup>（知県）と会見、晩<sup>146</sup>には泉州の長官である Inzuanto から大きなボードに書かれた命令書が届き、一行が今後道中必要とするものすべての支給を命じ、神父たちには輿を、兵士には馬が支給された。拒否しようとしたが、そ

---

て先払いの警吏が行う笞打ちについて解説する。肩にかけた反物の色、長さや、この後に開かれた宴会における司令官の姿勢などの描写はメンドーサにしかない。以下、いちいち記さないが、こうした儀礼的場面や旅程で起きた出来事については、一般的に言うと、サン・アグスティンが簡略なのに対し、ロアルカは具体的であり、メンドーサはさらに細部まで描き出している。なお、この司令官の職位については分からないが、ロアルカとメンドーサが、「彼には王望高が跪いて話しかけている」と述べているように、王よりは上の職位にあった。

<sup>141</sup> バリ本、ロアルカ、メンドーサにはこの説明部分はない。

<sup>142</sup> バリ本、マドリッド本は Tangoa, ロアルカは tangoa (Tanguo), メンドーサは Tangoa.

<sup>143</sup> ロアルカ、メンドーサは道中について具体的に記し、メンドーサのほうが詳しい（途中で待機していた船の数など）。また、ロアルカは、道中に櫛比する町々について質問したところ、「たいたことはない。2000～3000の人口を有する町はざらにある」という答えが返ってきたとする。メンドーサは回答者を見送りに来た40隻の司令官と特定し、さらに「王の住む地方に行けばその名に値する町がいくつもある」とも答えたとし、地の文の中で沿岸の諸都市の人口が3000~4000と述べる。

<sup>144</sup> サン・アグスティンは人口10000～12000とし、郊外も含めれば15万とする。ロアルカは1万、メンドーサは3000、マドリッド本は8060とする。なお、ロアルカは一行が船から降りると徒歩で同安へ向かったとするが、メンドーサは輿と馬の用意を神父がいったん断るも、興泉道の命令だからと拒否されたとする。次に見るように、サン・アグスティンはこの話を同安到着後のこととしており、両者はくいちがっている。マドリッド本も、同安入り前の出来事(7.10)としている。

<sup>145</sup> 町の *corregidor* または *alcalde mayor* と説明する。ロアルカ、メンドーサは Ticoan とし、それぞれ *capitan y alcalde mayor*, *capitan o corregidor* とする。文官なのだから、サン・アグスティンの説明が適当である。なお、知県はこれまでの道中に会った者の中でもっとも偉そうにしているし、中左所から同安までは彼の管轄下にあるのだから事実偉いのだろうと述べているが、これはロアルカ・メンドーサにはない。彼は一行がはじめて出会った文官である。

<sup>146</sup> ロアルカ、メンドーサは、晩に「サルミエントと私」が散歩に出たことを述べ、興味津々のご婦人方を見世物になったこと、「遊樂の家」に出かけたことを記す。

れでは長官の機嫌を損ねることになると言われてやむなく従った。翌日、同安を出発し、泉州に向かう道中に400人の兵をひきいた司令官に遭遇<sup>147</sup>、そのエスコートで泉州城に入った<sup>148</sup>。長官に会いに行く<sup>149</sup>途中、Tihu（知府、「都市の民政長官」と説明する）に出会っている<sup>150</sup>。長官に謁見する際に、跪くよう命じられ、これに従った<sup>151</sup>。この謁見の場面については、サン・アグスティンは他よりも具体的に描き<sup>152</sup>、この後の福州の巡撫との謁見場面よりも詳しい。もともと王望高を派遣したのは泉州の長官であり、スペイン人側にとっても、ここで問題が解決するに越したことはなかった。叙述の山場がここにあるのも、そのためかも知れない。翌日、長官は林鳳について詳しく聴くためにロアルカとサルミエント、そしてサルセドが派遣した兵士（クエンカ）が呼び出された<sup>153</sup>。ロアルカやメンドーサによれば、この時、興味深い応酬が見られたという<sup>154</sup>。

<sup>147</sup> ロアルカはここで福建省の馬はなべて小さいが、内陸に行くに軍用に適した馬がいるという情報を提示する。メンドーサはここでは「この国の馬はなべて小さい」と一般論に解消しているが、第1部で内陸の馬の良質に言及する（日本語訳 p.161）。

<sup>148</sup> いつ着いたのかを記さないが、道中2日としており、後の記述からすると10日ということになる。ロアルカ、メンドーサは7月11日とする。メンドーサはさらに「土曜日」と記すが、これは数え間違いで月曜日が正しい。

サン・アグスティンは人口を5万とするが、ロアルカは6万、メンドーサは7万とする。サン・アグスティンは「有名な橋」の長さを600パソ（歩）強とするが、その場所は示さない。ロアルカとメンドーサは800パソとし、町を出たところにかかるとする。ロアルカは城壁の高さを5ブラサとし、メンドーサは城壁の高さと厚み（7ブラサ、4ブラサ）の双方を示す。

<sup>149</sup> マドリッド本は翌日のこととする。

<sup>150</sup> ロアルカとメンドーサは道中に出会った役人を「都市の3人のオイドール（聴訴官）の1人」とする。ロアルカは第2部でも知府を3人のオイドールの1人としている。

<sup>151</sup> 『南中国』は、ロアルカが「彼とサルミエントの2人が叩頭に反対したが、神父たちの説得により、しぶしぶ従った」としていることを指摘している（p.251）。メンドーサはさらに「こうした行為は神への冒瀆にあたらぬ」という神父たちの見解を補う。

<sup>152</sup> 矢沢（p.325）がすでに指摘しているように、描写はメンドーサと（そしてロアルカとも）かなり異なっている。ロアルカとメンドーサが述べる書簡の呈上には触れていない。

<sup>153</sup> ロアルカは、これを謁見から帰った後で要人の訪問を受けたその翌日のこととするが、メンドーサは要人が訪ねてきたのを12日（日曜日－火曜が正しい）とし、ロアルカが呼び出されたのは、その翌日とする。

<sup>154</sup> ロアルカとメンドーサは、長官には王望高とシンサイの報告の真偽を確認するつもりがあり、結果として彼らの虚偽を見抜いたこと、また長官が援軍を申し出たがこれを断ったこと、使節に対して拝跪を要求するのは非礼だと主張したことを伝える。前日の華やかな会見より、重要なやりとりがあったのである。サン・アグスティンは、林鳳の情報が聴取されたとするのみである。

その次の日に宴会が開かれた<sup>155</sup>。

一行は長官との交渉を望んだが、Hogchiu<sup>156</sup>（福州）にいる Combun（軍門）のもとに行くよう言われた。火曜日に<sup>157</sup>泉州を出発、日曜日には福州に到着した<sup>158</sup>。途中、Linhua（興化）を通過したが<sup>159</sup>、ここは「遠からぬ昔に日本人の略奪にあい<sup>160</sup>、郊外の家屋が破壊されただけでなく、城内にも人の住まない地区があるにもかかわらず、今日の人口は3万<sup>161</sup>以上と言われている」。

\*

\*

\*

ここまでパリ本とサン・アグスティンには微細な違い（すでに注記してきた）、文章表現の違いはあるものの、近似しているといつてよい。しかし、福州入り以降の部分については両者の間に随分開きが出てくる。それを具体的に示すために、以下にパリ本の全訳を示す（ゴチックにした部分はサン・アグスティンにはない。なお、文章表

<sup>155</sup> ロアルカは会見の翌日に一行が招宴にあずかったとするが、メンドーサは2日後（15日ということになる）としていて、両者の日程記述はずれている。メンドーサに基づくところがあったのかどうかは分からない。この時の宴会が、ラーダの第2部の「食事作法と宴会」の章の主たる素材となっている。

<sup>156</sup> パリ本は hocchiu, ロアルカ、メンドーサは Ucheo である。

<sup>157</sup> 7月12日ということになる。ロアルカとメンドーサは出発の日付を示さないが、ロアルカは14日、メンドーサは16日ということになる。

<sup>158</sup> ロアルカ、メンドーサは7日で福州に達したとする。

<sup>159</sup> パリ本は linhua, ロアルカは Megoa (Racqua), メンドーサは Megoa である。ここで、ロアルカは、彼とサルミエントが長官 (governador) について、知府 (Tihu) (町のオイドールと説明) を訪問したことを記しており、メンドーサもこれを踏襲している。矢沢 (p.337) は知府より上席の長官がいるはずがないので、メンドーサの記述に混乱があり、それは彼の創作にかかるものとしているが、ロアルカにもとづいただけである。

<sup>160</sup> 『南中国』 p.254 は、1562年の倭寇の襲撃を指摘するが、ロアルカは数年前、メンドーサは30年前とする。マドリッド本は20年前とする。後二者に従えば（マドリッド本が旅行直後に書かれたとしての話だが）、1555年ころのことになるが、嘉靖四十一年（1562）に興化府城が陥落したことを指しているのはまちがいない。ロアルカとメンドーサは、今ではマニラでクリスチャンになっている3人のチナ人が倭寇の手引きをし、50人の日本人がチナ服に変装してまんまと入城、その後続（ロアルカは1000人、メンドーサは20000人）が押し入り、いったんは府城を占領したが、大軍（ロアルカは70000、メンドーサは副王が派した60000）が差し向けられて、日本人が逃走したことを記す。『皇明従信録』巻32 嘉靖四十一年十二月条に、倭寇の奸細5人が福建に救援にかけつけていた劉顕の兵卒を装って入城に成功、さらに後続がやはり劉の兵を装って入城して虐殺を行い、3か月占領の後、平海衛に去ったことを記す。

<sup>161</sup> マドリッド本は2万とする。

現はもとより、細部の違いはいくつもあるが、それには触れず、サン・アグスティンが大きく違うところだけを { } 内に斜体で示し、パリ本にない部分には+を付す)。

福州に到着すると、我々は郊外に宿を取った<sup>162</sup>。郊外はきわめて広く、2レグアもあると言われている。副王の命令でカピタンが我々を迎えに来て必要なものを支給した。翌朝早く市内に赴き<sup>163</sup>、彼らが Combún あるいは comun (軍門) と呼ぶ副王 (巡撫)<sup>164</sup>、toutoc (都督)<sup>165</sup> と呼ぶ総司令官に会いに行った { + 副王の宮殿の大きさについてはここでは省略することにするが<sup>166</sup>、それ自体が大きな都市のようである }。彼らの我々への応対は、副王が椅子から立ち上がらなかったのを除けば、興泉道と同じだった。彼は手紙を手に取りいくつか質問すると、我々に暇を取らせた { 懇慫に感謝の言葉を述べ、遠方からわざわざやってきたことに謝意を表し、彼宛の手紙を受け取ると、軍

<sup>162</sup> ロアルカは、この日に蘇木 (brazil) を携えた琉球 (yslas de los lechos) の朝貢使者に会ったとし、彼らを「姿よく、立派なあごひげを蓄え、髪は短く切っている」と描写する。ラーダは第2部で琉球人と会ったことを記す (『南中国』 p.303) が、容貌には触れない。この年に入貢したのは、正議大夫蔡朝器らの一行である。『明実録』には万暦三年八月丙戌に入貢の記事が見える。

<sup>163</sup> ロアルカやメンドーサは城壁、防備施設の配置、水の補給システムについて記す。

<sup>164</sup> 劉堯誨である。

<sup>165</sup> ロアルカは totoo (tutao)、メンドーサは totoc としている。なお、ロアルカは第2部4章で官僚の名称をとりあげており、そこでは totoo (tutuo) とし、ラーダは第2部で Tontoc とする。『南中国』 p.249 はこれを提督とみなし、漢訳 p.216 も同じだが、矢沢は都督とする。1省の総司令官という説明がついているところからして、総兵官を指していることは確かで、彼に都督 (あるいは提督) が加号されていたとみるべきか。

ロアルカ・メンドーサはさらに caguntoc (cagnitoc)、cagontoc との会見について記している。ロアルカの第2部は軍門、都督に続くナンバー3として、guatoc (guatuc) をとりあげているが頭音を書き落としたのだろう。ロアルカ、そしてここでのメンドーサはいずれもこれを alferes mayor (大旗手) に該当すると説明する。パリ本は cacunto、ラーダ第2部は Cancunto (『南中国』 p.298) とする。また、メンドーサはこの語が後出するところで tesorero (財務官) と説明しており、矢沢はそれにもとづいて督糧道かと推測する (p.366)。メンドーサのいう tesorero は、ロアルカ第2部ではその次に取り上げられている布政使についての説明であり、メンドーサはこれを読み誤ったものだろう。漢訳はこれを不詳とし、ボクサーは分巡道と混同したものと推測しているが、福州にある官僚を並べているのだから、それは違う。おそらく監軍道であろうと思われる。福建では総兵官を補佐し、倭寇対策にあたるものとして、嘉靖年間設置され、万暦八年 (1580) に廃止されている (杜志明「明代監軍道初探」、『蘭台世界』 2011-8 下、pp.62-63 参照)。

<sup>166</sup> ロアルカ、メンドーサは詳しく記す。

官に命じて宿舎まで案内させた<sup>167</sup>。都督は我々の骨折りに大いに感謝し、我々が林鳳と結んでチナを略奪することもできたであろうに、そうせずに逆に彼を滅ぼそうとしていることに感謝すると述べた<sup>168</sup>。その後、城壁に隣接する「+ 大層美しく大きな」宿舎をあてがわれた<sup>169</sup>。今まで通ってきた都市同様に野次馬対策として、軍門は、滞在中ずっと2人の役人 (alcaldes) をつけて、我々を困らせる者がいたら処罰するよう命じ、そのための認可状を与えた。それは大きな板で、我々がやってきた経緯と役人もつ権限が書かれていた。その板は役人の座所の近くに置かれ、皆に見えるようにされていた。こうして日中は役人がそこにいたが、夜になると、武器を持った兵が40人やってきて、我々の宿所の内外の警備にあたった。我々への干渉とはいえば、誰かが他の家に行くとこれを毎日宿主のもとに送り届けるくらいのことであり<sup>170</sup>、宿主からは必要な物資を購入するために16レアルの重さの銀片が支給されたが、物価の安さを考えればこれは過分なものであった。

翌日、副王からプレゼントが届けられたが、我々が出向く必要はないと言われた。興泉道の時同様に盛大な宴会が催されたが<sup>171</sup>、彼は臨席せず、その名代として彼の護衛にあたる軍官の主だった者3人<sup>172</sup>が出席した「+ 宴会の間、一団の兵が家の内外で伺

<sup>167</sup> ロアルカ、メンドーサは会見の仔細について語る。

<sup>168</sup> こうした謝辞はロアルカやメンドーサには見えない。なお、ロアルカとメンドーサは、巡撫のみならず都督らにまで跪礼を強いられたことはマニラでの長官による中国商人優遇に比して余りにも礼を失していると、スペイン人たちが王望高やシンサイに不満をぶちまけたことを記す。彼らは、王やシンサイが自己の利益のために一行を利用しようとしていることにすでに気づいていた。一見、平穏無事に終わったかのごとき使節行内の不和はおそらく、その後のフィリピン政庁の態度にも影響したであろう。

<sup>169</sup> ロアルカ、メンドーサは、裁判が行われる官邸とする。

<sup>170</sup> ロアルカ、メンドーサは外出して寺を訪問したこと、やがて禁足令が出たことを記す。

<sup>171</sup> ロアルカは、福州の城内に入ったその日に宴会があり、翌日に都督による宴会があったとするが、メンドーサはラーダ同様に宴会は到着翌日とし、さらにその次の日に都督が宴会に臨席したとする。

<sup>172</sup> ロアルカ、メンドーサは2人とする。



候していた}。宴会の様子<sup>173</sup>については以下に述べるだろう<sup>174</sup>。福州滞在の3日目に我々を連れてきた軍官王望高が、この省を訪れ、当時そこから7日の行程の距離にあった quiampin? 市にいた王の巡察使に会って遠征の報告をしたいと願ひ、スペイン人を2、3人連れてゆこうとした<sup>175</sup>。しかし、我々は正式な謁見の機会を与えられていなかったことに不満を抱き、まず副王に我々がやってきた目的について提案した後、どこでも望むところに行こうと答えた。すると、彼は副王のもとに赴いて我々の趣旨を伝え、副王は我々の望みを書面にして翌朝提出するように命じた<sup>176</sup>。そして王望高には、即日

<sup>173</sup> ロアルカ、メンドーサは、都督の宴会において三国志を主題とする芝居が演じられたことを紹介する。前掲注51のエリス (p.85) はロアルカとメンドーサの描写の違いに注目する。すなわち、ロアルカは、この芝居では白・赤・黒の顔をした3兄弟(劉備、関羽、張飛)のうち赤面の男(関羽)が Laupi (劉備) をもりたてて君主にしたとするだけだが、メンドーサは当時の君主で「女性的で邪悪な」Laupicono (ロアルカが正しく劉備を Laupi としているのに対し、曹操と劉備を混同している) から国を奪ったとしているところに意味を見出す。すなわち、通常男性的とされる曹操をあえて女性的 (afeminado) とすることで、彼が国を奪われるのは当然であり、新しい君主は白く (メンドーサの観点からすれば、これは西洋人キリスト教徒と重なる) 男性的であらねばならないという彼の見方を投影しているというのである。しかし、ロアルカは、ここでは関羽が劉備を王にしたと述べるのみであり、第2部の歴史を述べる中では暗君 (hombre de poco saber) の献帝をおいの劉備が倒したとするだけで、いずれも曹操にあたる人物には言及しない。また、ラーダもやはり第2部の歴史の項目で劉・関・張の3人が献帝に反旗を翻し、劉が王位に即位したとしている (彼は劉備の白には触れないが、関の赤、張の黒には言及しているので、やはり芝居を意識して記述しているが、次注に述べるように演劇にはいささか冷淡で、あくまで歴史上の出来事として叙述している)。メンドーサが「女性的で邪悪」としているのは、確かにロアルカを脚色したものだが、彼が曹操を知るわけもなく、これは献帝を指しているに過ぎない。

<sup>174</sup> ラーダの第2部の「宴会」の頃には演劇への言及もあるが、「歴史・戦争を題材にしたものがある」とするだけである。上記のような芝居のあらすじを紹介することはない。ロアルカ、メンドーサはさらに別れの宴での芝居の筋 (ある若者の出世譚) まで紹介する。ロアルカの関心とラーダの無関心は好対照を示す。のちに、フィリピンの修道士たちが、来島する中国人の演劇を偶像崇拜を想起させるものとして排除しているのを見れば、このラーダの冷淡さは頷けるところである。

<sup>175</sup> ロアルカとメンドーサにもこの話は出てくるが、文脈は違う。まず、パリ本が王望高の発意によるものとしているのに対し、副王への嘆願書を王望高に書いてもらった後、王はただちに巡察使のいる Ampin (矢沢は南平とし、何高済は安平とする。巡按御史が福建に入ってくる径路を考えれば、前者が正しいだろう) に向かったとするだけで、王の提案について触れない。メンドーサは王が手紙を書いたことで当局から嫌疑を受け、それを避けるために王が逃げ出そうとしたとして、パリ本と話が逆転している。また、この出来事がいつ起きたのか明確でない (日誌風の記述が終わった後に置かれているため)。

<sup>176</sup> ロアルカ、メンドーサは、宴会の翌日に巡撫のもとに進物を持参したところ、王望高とシンサ

彼らが Çanhy<sup>177</sup> と呼ぶ巡察使のもとに向かい彼に福州に来駕するよう頼むことを命じた。この日は都督からも宴会に招かれたが、そのやり方は副王のものと同様であった。

翌朝、指示通りに嘆願書を副王に送ったが<sup>178</sup>、その末尾には「修道士は軍人ではなく、商品を求めるのでもなく、真の神や天の事柄について教えにやってきたのであり、そのために国王陛下が当地に派遣されたのである。土地の言葉を知らなければ言うことを理解させられないので、言葉を習得できる場所に滞在することを許されたい」と記した。軍門は「神父たちの滞在はうれしいことだが、当座は認められない。ひとまずは戻って海賊林鳳のことが片付けば、しかるのちに望み通り滞在を認めよう。スペイン人の当地における安全と交易については王に手紙を書くので、我々がこの町を出る前には返事が来るだろう<sup>179</sup>」と答えた。{副王は我々の上申書を受けとり要求のすべてを認める風を見せたが自分には決定権がなく、北京にいる皇帝に報告し、顧問会議の検討を経て決定されることになっている}と答えた。{+副王は我々の通訳を介して我々、我々の習慣、力、生活様式について好奇心旺盛に多くの質問を行い、答えに驚嘆していた。チナ人は傲慢で自分たちが世界一だと思っていたからである。我々も文字を持っていること、彼らと同じように我々の本を印刷するための技術を持っていると聞いて大いに驚いた。彼らは我々よりも数世紀前に印刷術を持っていたのである。}<sup>180</sup>

---

イしか入室を許可されなかったことを記す。これは前注に述べた王望高の嘆願書提出と同じ時のことだと考えられるが、ロアルカとメンドーサは2つの事柄を切り離しているため、時間の関係が曖昧になってしまっている。なお、ロアルカはこれに続いて、巡撫がスペイン軍人の武器を見たいとねだったことを記すが、メンドーサはこれを翌日のこととしている。

<sup>177</sup> ロアルカ、メンドーサは Sandin とし、ロアルカは第2部でその任期を1年とする。マドリッド本は Charin または Charan とする。矢沢、何高済が察院とするのは正しい。パリ本の çanhy については誤写でないとするなら、説明できない。

<sup>178</sup> 矢沢 (p.359) はラーダの言う上申書とメンドーサの言う手紙が同一のものであろうとし、宴会の翌日に出したとするラーダの記述は記憶違いだとするが、パリ本を見れば、福州滞在の3日目と時期が特定され、話もすんなりつながる。むしろ、メンドーサのほうが曖昧だというべきだろう。

なお、このあたりのロアルカの記述は読みにくい。王望高が南平にスペイン人を連れて行こうとしたのを彼らが嫌がったという話の次に、増長していたシンサイとスペイン人の間が険悪になったことを記した後、彼らの申請書への巡撫の返事について記すのだが、シンサイの話とどうつながるのかが不明である。メンドーサは、シンサイのことは述べない。

<sup>179</sup> ロアルカは返事の来る時期を3か月以内(6か月以内)とする。

<sup>180</sup> どちらのバージョンにしても、ラーダにとって第2部の叙述の源になった書籍購入の話がない

後に、都督・Çanhy・興泉道が福州にやってきてから彼らと交渉した時も同様の返事だった。当時、副王は全省の長官、要人すべてを召集した会議を開こうとしており、巡察使やすべての人たちが福州に集まってきたからである<sup>181</sup>。彼らは合意の上で王に手紙を書き、「全員の結論として、スペイン人が早晚林鳳を生け捕るか殺せば、その望みをかなえ、兄弟として扱うべきだということになった」と述べた。興泉道は福州に来ると、あらためて事態を把握すべく我々を呼び<sup>182</sup>、林鳳に対して100隻の船団を送るのはどうだろうかと尋ねた。我々は「時すでに遅く、無駄だと思う。林鳳は包囲されてから3か月以上たっており<sup>183</sup> もう持ちこたえられないはずで、捕虜の話によれば食糧も不足している。すでに破滅したか、逃れたかのどちらかだろう。また、この6か月の間は風向きの関係で出て行った船は戻れないし、あちらの海岸では食料が乏しいので大変な困窮に陥るだろう。林鳳が捕えられていれば、連行するには2、3隻の船で十分であろう」と答えた<sup>184</sup>。そこで、我々は予定より早く送り返されることになり<sup>185</sup>、chetcan（浙江）省の軍官 Syaoya が呼び寄せられた<sup>186</sup>。彼は勇敢、賢明で、戦に通じ

が、ロアルカとメンドーサにはある。

<sup>181</sup> マドリッド本は、insuantoquian, canpunto dihoc, funaytoto らがスペイン人呼び出し、林鳳を捕えることができれば港が与えられるだろうと、述べたとする。ロアルカとメンドーサでは、一行の出発がいったん決まってから、巡察使の福州到着まで待つことになったとして、その到着をロアルカは福州到着25日目、メンドーサは回答があってから25日目のこととする。また、この間に彼らが見た軍事教練の様子などについて記す。ロアルカは軍事教練が毎月行われるとするだけだが、メンドーサは月の初めの数日に行われると特定する。ラーダ第2部も教練を目撃したと述べるが、2人のカピタンのもと各600名が模擬戦を演じたのに対し、ロアルカは約1000人（como mil）、メンドーサは20000人とする。実は注160でも倭寇の数が同様にロアルカ約1000、メンドーサ20000となっているが、おそらくいずれも como を誤写ないし誤植したものだろう。

<sup>182</sup> ロアルカとメンドーサは副王以外の関係官僚が出席する会議が開かれ、これを主導したのが興泉道であり、彼によって聴取が行われたとする。

<sup>183</sup> 包囲は3月末に始まっており、福州には7月中旬に着いているので、この記述が正しければ、会話が行われたのは一行が福州に到着してからさほど間がない頃だったことになる。

<sup>184</sup> このやりとりは、ロアルカとメンドーサには見えない。興泉道が本気で100隻の船団を送ろうと考えていたかどうかは怪しいが、もしそんな大船団にフィリピンにやってこられたら迷惑であり、この回答はもっともなものと言える。

<sup>185</sup> ロアルカ、メンドーサは一行のほうが早期帰国を希望したとする。

<sup>186</sup> ロアルカ、メンドーサでは、福州出発前の宴席の場面に初めて登場し、前歴について語られることもない。ロアルカは chaulatiai とし、メンドーサは Chautulay とする。この人物は、陳荆和によって邵岳に同定されている（p.44）。彼については後述する。

ており、かつては海賊 (cosario) であった。数年日本に滞在したが (anduvo algunos años en los Japones)、他の海賊を捕えて王に帰順した。王はそれに対して褒美を与え、彼を日本への使者として派遣し (lo embió por embaxador a los Japones)、そののち浙江の軍官とした。我々とともに送ろうとする船団を彼に託して派遣し、事態の推移を見極めたくて、必要とあらば戦う、ということになったのである。

彼の到着を待つ間、ある騒動が持ち上がった。13隻の船団を引きつれた海賊が海岸に攻め寄せてきたのである。その知らせは2日のうちに福州に届いたが、その正体がわからなかったので、皆これを林鳳と思い込んだ。副王は王望高とシンサイを呼び、厳しく責めたて「林鳳の艦隊が減じたという報告は偽りではないか。こうして今、13隻の船で海岸を略奪しているのだから。スペイン人が汝らに金をつかませたのだろう。連れて来た者たちはスパイに違いない」などと言った。そのために2人は我々のところにやってきて、我々が連れてきた捕虜から聴取を行った。しかし、神のご配慮により、1日半後に海賊の正体が割れた。13隻のうち7隻が降伏し、港を警護していた船が出勤して2隻を鹵獲、海賊は残りの4隻で逃げ出したのだが、彼が林鳳の幹部の1人で、数年前に彼から独立し (船数は分からない)、海賊をしていたことが分かったのである。これで騒ぎは収まった<sup>187</sup>。

またこの間に、スペイン人は毎日借りた馬に乗って街に見物や買い物に出かけていたが、副王から「軍官や要人がスペイン人と路上で鉢合わせした時に、彼らに通常行われるべき敬礼がなされず、習慣となっている下馬もしないという苦情が出ているので、街に出てはいけないし、もし出ようとしたら宿所に連れ戻す」との命令が出た。

<sup>187</sup> この話について、ロアルカとメンドーサは福州滞在20日目の出来事としている。注181にあるように巡察使が来たのはその後ということになるので、彼が会議に立ち会い、その結果邵岳を呼び寄せることになったとするパリ本とは叙述が逆転している。また、ロアルカ、メンドーサともに事件そのものの記述は、パリ本ほど具体的ではない。パリ本にないのは、両者がこの海賊を林道乾の一味として、その名を記すところである (ロアルカは tanta、メンドーサは Taocay)。

なお、ロアルカは、王望高が虚言を吐いてスペイン人の功績を横取りし、捕虜を20人ほど隠すなど不正を働いていたのに対し、シンサイはまだしも真実を口にすることがあったために、この事件以後、シンサイの言に信が置かれるようになり、彼はそれまでの sabzon (千総) から pesen (把総) に昇格して王望高と肩を並べたと記す。メンドーサは王の不正には触れず、ただ王望高に高い地位が与えられていたことがシンサイの不満を招いたとしている。

近隣や近くの城壁に出かけるのはよく、毎日散歩に出て、街に繰り出すことも多くはないがあった。一方、軍官や要人のほうから我々を毎日訪ねてきた<sup>188</sup>。

副王から我々が祈りに使う本を見たいので送ってくれと言ってきたので祈祷書を送ったところ {彼は我々が印刷術を持っていることの証拠として、印刷本を送ってくれと言ってきた。彼の好奇心を満たすためには祈祷書しかなかったのをこれを送った。こうして彼は自分たちだけが印刷術をもっているのではないことを知ったのである}、彼はそこから葉にしていた磔刑、十字架、エッケ・ホモ、聖母戴冠 {聖母像}、聖ブリギダ {諸聖人} 図など5, 6枚を抜き出し、この本をくれるよう言ってきた。祈るために必要だと答えて、かわりにフライ・ルイス・グラナダの本を与えた。また、我々と彼らの言葉で書かれた最良の祈りの文句をせがんだので、パーテル・ノステルと十戒 {アベ・マリアとクレド} を送ると、それらを読んだ人は皆満足した {彼はその説明を求め、聞いて喜び、暗記しようという姿勢を示し、あれやこれやで時間を費やした}。もし、君主が妨害しなければ、簡単に改宗する人たちだと思う。このことについて話し合った何人かは我々が信じている事柄に簡単に同意したからである<sup>189</sup>。また、ポルトガル人との付き合いによって信者になった者にも数人出会った。興化ではアンドレスとヘロニモ、帰路では港でフランシスコとペドロに会った。彼らを信仰の事で励ますと、露見することを恐れているが、信仰は堅持すると答えた<sup>190</sup>。福州から出発する数日前に、福州の牢獄に8年間囚われているポルトガル人のことを知った。彼はほかの仲間とともに日本人の船で渡来し、仲間はすでに獄死したという。我々に、自分と大変困窮している誰かを助けてくれないかと言ってきた。我々には、投獄の理由としてチナ人の敵である日本人の船で来たこと以外は言わなかった。憐れみを催し、彼と面会できるよう手を尽くしたが、いかにしても、我々や一行の誰かと彼が話すことはできず、むしろ我々にこのことを知らせた者を罰するために審問が行われた<sup>191</sup>。

<sup>188</sup> ロアルカ、メンドーサは外出禁止をスペイン人への警戒感によるものとする。なお、サン・アグスティンは印刷術の話から祈祷書への話と移行しているので、一見するとシームレスだが、ここに見るように、かなりの分量の記述がカットされている。

<sup>189</sup> ロアルカとメンドーサもこの話を記すが、ここから改宗への期待を引き出すことはない。

<sup>190</sup> この話はロアルカとメンドーサにはない。

<sup>191</sup> この話はロアルカとメンドーサにもあるが、ポルトガル人のことを知った時期を特定していない。

Siaoya が到着すると、我々は送還されることになり、知府と興泉道が我々を送還する船の準備を急がせるために先に出かけた<sup>192</sup>。長官たちや副王は任期満了が5か月後に迫っていたが、林鳳の処理がきわめて重要なために、巡察使が国王の名において任期を事件解決まで延長した<sup>193</sup>。chuynchiu(泉州)と chyonchiu(漳州)の長官である興泉道と Hayto(海道)<sup>194</sup>の2人に林鳳討伐の任が与えられ、それぞれが船5隻を派し、泉州<sup>195</sup>の5隻の司令官には王望高、漳州的5隻にはシンサイが任命され、全体の総司令官には Siaoya が任命され<sup>196</sup>、シンサイと王望高には petzon(把総)の称号が与えられたが<sup>197</sup>、これはみずから下吏を面前に引き据え処罰する権限を与えるものである。しかし、我々の乗船前にこの権利を行使することは許されなかった。副王は最初福州に入った時同様、盛大な送別の宴会を開いたが、自身は立ち会わず、我々に必要なものを支給する命令を発し、宴会とプレゼントを準備したのは alferes general で総兵官の次席である監軍道であった<sup>198</sup>。修道士・兵士各人に鞍と馬勒を付けた馬1匹と絹の日傘1本、絹布数枚を与え、使用人には絹と綿の布数枚が与えられた<sup>199</sup>。これらはすべて船で諸島に持ち帰るものであった。さらに、諸島の長官と野戦司令官にはそれぞれ馬1匹、傘1本、絹布40枚、輿1台を、長官にはさらに紗10枚が与えられた<sup>200</sup>。これとは別に諸島の要人に配るために絹布40枚、傘14本、馬3頭が、兵士に配るために綿の黒布200枚、普通の傘300本が与えられた<sup>201</sup>。司令官には長官と野戦司令官宛の手紙が

<sup>192</sup> ロアルカ、メンドーサは巡察使到着の3日後とする。誰の到着を待っていたかが、パリ本と異なるのである。

<sup>193</sup> ロアルカ、メンドーサはこの処置に言及しない。

<sup>194</sup> ここで、ラーダが海道を漳州的長官としていることが分かる。

<sup>195</sup> ロドリゲスの転写はここで混乱し、「泉州の5隻を王望高とシンサイに」としてしまっている(p.285)。

<sup>196</sup> ロアルカ、メンドーサで邵岳が登場するのは、この次に出てくる宴会の出席者としてであり、その後も影は薄い。

<sup>197</sup> 前述したように、ロアルカとメンドーサではそれ以前に2人とも把総となっている。

<sup>198</sup> ロアルカ、メンドーサでは、副王の宴会の後、彼の官邸に赴き、プレゼントが与えられたとする。

<sup>199</sup> ロアルカとメンドーサは、修道士に絹8枚、軍人に4枚、各人に馬1頭、日傘1本が与えられたとする。

<sup>200</sup> ロアルカは、長官・野戦司令官に紗各10枚、メンドーサは各20枚とする。両者とも傘は2本である

<sup>201</sup> ロアルカはマニラの兵士たちに絹40枚、そして綿布300枚、傘300本を与えたとするが、メンドーサは包圍戦参加者に絹40枚、兵士に綿布300枚、傘300本としている。

託された。副王は我々を呼び、「4 か月では王の返事が得られないので、汝らはすぐに出立し、林鳳のもとに向かうよう決まった。こちらに戻って来る頃には王の返事が届いているだろう。林鳳を連れてくれば望みは達せられよう」と言って<sup>202</sup>、我々を出発させた。{我々の処遇を決める時が来ると、副王はまずこのために福建省の要人の会議を召集し、この会議からの上奏により皇帝が事情を知るまで我々がチナに滞在することは不可能なので、マニラに戻るべきであると決した。彼らは我々がマニラから携行した書状に対する返答でも同じ理由を述べていた。副王は帰路に必要なものの支給を命じ、随行する軍官数名を任命した。我々は書状の中で言及されているプレゼントを渡すと、福州の町を出た}。福州に滞在したのは35日間である<sup>203</sup>。

福州は我々が見た中で最大の都市であり、Hoquien または fuquien 省の主都である。城壁の高さは4ブラサ、厚さは3ブラサ {高さ3ブラサ、厚さ4ブラサ} で<sup>204</sup>、すべてが石できており、瓦に覆われている {城壁は花崗岩で覆われ、町はすべて石造の家からなっており、瓦ぶきである<sup>205</sup>}。水濠が切られている場所とない場所がある。街路にはメキシコのように運河があって船で都市に物資を補給でき、それを小橋で渡る。城内には人気のない高い丘があり、その斜面を伝って城壁を越える<sup>206</sup>。郊外は3つか4つあり、非常に大きく、我々が通ったところの長さは2レグアに及ぶ。別のところは一見すると {聞いたところでは} もっと大きいようである。前述の丘に上ってそこから都市全体を眺めた。人口は10万から15万と言われる {15万}<sup>207</sup>。

{+ 我々は往路と同じ都市を通過して行った。必要なものは往路同様のやそれ以上に支給された。行くところどこでも豪勢にもてなされ、盛大な宴会が催された}。副王は、興泉道がやったように我々に板の認許状を与えた。そこには修道士はそれぞれ

<sup>202</sup> ロアルカとメンドーサには、この言はない。『明実録』によれば、礼部での「呂宋番夷への議賞」が裁司されたのは九月丙申のことである。

<sup>203</sup> ラーダの1576.5.1付書簡(注27)でも35日としている。ロアルカは37日、メンドーサは47日、マドリッド本は40日とする。メンドーサは7月23日着、8月23日発としているから、明らかに数え間違いなし誤植である。

<sup>204</sup> ロアルカとメンドーサは高さ5ブラサ、厚さ4ブラサである。

<sup>205</sup> 家のすべてが石造であるわけもなく、これは誤記であろう。

<sup>206</sup> ロアルカ、メンドーサにこうした描写はない。

<sup>207</sup> ロアルカ、メンドーサは、人口には言及しない。

8人担ぎの輿を、兵士 {ロアルカとサルミエント} には4人担ぎの輿を使い、随員は馬<sup>208</sup> または小さな2人担ぎの輿を使い、荷担ぎには20人以上<sup>209</sup> があてがわれた。これらの費用は王庫から出され、さらに食費として22レアルが支給された<sup>210</sup>。{道中必要なものが支給され、この目的のために以上の指示を記した板をもった者が先行し、行く先々で王庫から使節にふさわしく支出された}。{+ 行く先々で鄭重な儀礼で迎えられ、役人たちが彼らの流儀で豪勢な宴会を開き、親切と鄭重をきわめた。道中ずっとこういう調子だったので、耐え難いほどであった。さらに我々を悩ませたのが我々の通訳を介して彼らがしつこくする変わった質問で、それを理解するのは難しく、満足な回答をあたえるのはさらに困難だった。}

かくして、8月22日に福州を出て<sup>211</sup>、月末 {9月1日} には港に着いた<sup>212</sup>。出発前に港から3日の距離にある漳州を見物したいと思い、道を急いだのである<sup>213</sup>。到着すると、泉州・漳州の長官や、総兵官代理が彼らの8月1日(9月5日にあたる)に出発するよう急かせた<sup>214</sup>。軍門がこの日は出立に吉だと言ったからである。船はまだ準備できていなかったが、彼の言う通りこの吉日を逃してはいけないと、1隻に乗せられ、彼らの流儀に従って重々しい祭儀をおこない、その間号砲が鳴らされ、碇が揚げられた。船はしばらく川を上下した。これはこの日の星回りが吉であることへの配慮からであった。いったん、宿舎に戻り、3、4日の後にすべて準備ができたので出発の運びとな

<sup>208</sup> ロアルカ、メンドーサは、輿とするのみ。

<sup>209</sup> ロアルカは修道士に各6人、「我々」に各4人、使用人に各2人、これに物品運送の24人を合わせて76人とする(「我々」がロアルカとサルミエントを指すのだとすれば、修道士2人×6+軍人2人×4+随行員16人×2+24=76で帳尻が合う。メンドーサは修道士には8人とするところが違い、同数のリザーブが用意されたとする。ロアルカが1日2交替としたのを踏まえてのことである。

<sup>210</sup> ロアルカは1日2tael(両)の支給とする。

<sup>211</sup> ロアルカ、メンドーサは、「23日、火曜日」とする。

<sup>212</sup> ロアルカ、メンドーサは、旅程を急ぎ、4日で泉州に着き、2日で同安、1日で中左所に着いたとする。

<sup>213</sup> ロアルカ、メンドーサには漳州見物の話は出てこない。

<sup>214</sup> ロアルカ、メンドーサは、9月3日とする。



り<sup>215</sup>、長官たちは盛大な別れの宴会を張った<sup>216</sup>。しかし、強風のために聖十字架称賛の日<sup>217</sup>まで出航できなかった<sup>218</sup>。長官たちは大船に乗ってそこに投錨し、全船が出発するまで動かなかった。我々は川を湾口の tançu 島まで下った<sup>219</sup>。2日後そこを出て西に5レグア進み、laulo という町に着いた<sup>220</sup>。そこから南に24レグア進んで、林鳳が林道乾を破り、無人島となっている前述の Pihou (澎湖) 島<sup>221</sup>に到着したが、22日間足止めを食った<sup>222</sup>。強い北風は帰航にとっては順風だったが、強すぎたので船を出せなかったのである。そこから tacao 島<sup>223</sup>の端の parraoan<sup>224</sup>まで9レグアの距離である。タカオ島で物資を買うことに決し、ある川を目指すことにした。パイロットの言によれば澎湖から20レグアの距離である {我々は澎湖に進路を取り、そこからごく短い距離にある川に着いた。大きく水量豊かな川を上って行った}。

<sup>215</sup> ロアルカ、メンドーサは、興泉道がこの時に「派遣船には10か月分の食料を積んでいる」と言ったとし、ロアルカはさらに「マニラで中国人に何かあたえる必要はない」と言ったとする。前出の中国側の返書 (p.105) にも言及がある。サン・アグスティンが言うように、中国人たちは新長官サンデの冷遇に腹を立てた、とされているが、中国側であらかじめ配慮は不要と言っていたのである。10か月云々を額面どおり受け止められるかどうかはともかく、実際に彼らは半年近くマニラに滞在したが、その間何をしていたのかは全くわからない。なお、ロアルカはこの宴席ではじめて王望高とシンサイがカピタン (メンドーサはロウティア) の服装を着用したとする。

<sup>216</sup> ロアルカは泉州の長官、福州にいる総兵官の代理、そして漳州の長官 ato が浜で見送ったとするが、ato (<aitao) は「海道」の訛である。メンドーサは、この漳州長官=海道を理解できなかったので、海道に言及しない。

<sup>217</sup> 9月14日。サン・アグスティンは日付で示している。ロアルカ、メンドーサは「9月14日、水曜日」とする。

<sup>218</sup> メンドーサは出発した10隻のうち、1隻に修道士たち、ロアルカ、王望高が、1隻にサルミエント、クエンカ、トリアナ、シンサイが乗ったとする。ロアルカを読むと皆が同じ船に乗ったように見えるが、おそらく写本の欠落によるものだろう。

<sup>219</sup> ロアルカは島名を toata とする。メンドーサは名前に言及しない。

<sup>220</sup> ロアルカ、メンドーサも Lauilo (陳荊和は料羅に比定) とする。ロアルカ、メンドーサはここに着くまでに Chautubue 島、Gontzu の浜といった地名を挙げ、ロアルカは Gontzu の浜の背後の tribu (Taibu) 山を「交渉成立の際にはスペイン人が入植することになっていた場所」とする。また、Lauilo 以後、ロアルカ、メンドーサは Ochu (メンドーサ Corchu)、Ancon といった島の名を挙げる。

<sup>221</sup> ロアルカはこの島を Plon 島とする。メンドーサは両林の戦いにここでは触れない。

<sup>222</sup> ロアルカは3週間とする。また、ロアルカ、メンドーサは Plon 出発を10月11日とする。

<sup>223</sup> ロアルカの Tacaotican, メンドーサの Tocaotican にあたる。

<sup>224</sup> この地名は、ロアルカには出てくるが、メンドーサには出てこない。

その晩、タカオから漁師がやってきて、我々が行くつもりになっていた川に、ひと月の間林鳳が滞在していたと告げた。彼はパンガシナンから37隻で脱出した {+ 彼はルソンを尾羽打ち枯らした状況で離れ、古巣に戻って、これまでのダメージから立ち直ろうとしたのだ。} 彼はそのうちの装備された大船に乗り、やや小さいのが2隻、小船が34隻という内訳である。しかし、すべてづくりが悪く、小船数隻はパラオアンで蘆を切り、それで帆を作ったという {+ パンガシナンを脱出した37隻中、残ったのは11隻であった}。すべて信じたわけではないが、我々にとって非常に頭の痛い話であった {+ 我々は林鳳がすでに破滅したと信じていたのである。しかし、確報を得るまでは判断を保留した}。佐官、尉官、軍曹がすべて集められて {+ 王望高とシンサイが招集し}、どうすべきか協議した。ある者はチナに通報したほうがよいと言い、王望高とシンサイは「こちらには大きく装備の整った船があるのだから林鳳と一戦交えるべし」と主張した<sup>225</sup> {漁師によれば、林鳳は船隊すべてを結集したわけではなく、数隻がパラオアンの河口で物資を補給し、葦を切って帆を作ったという}。司令官のSiaoyaは「私は林鳳と戦うために送られたのではない。もし、そういう目的であれば、別の人間が率いてきているはずだ。林鳳と自分の兵の違いはよく分かっている {もっと船と兵が与えられたはずである} {+ 林鳳の老兵は勇敢で戦いに慣れており、チナの恐怖の的だが、こちらは徴集されたばかりの新兵で、経験がない}。スペイン人を彼の地に送り、林鳳が包囲されている状況を見るために派遣されたのである。林鳳と戦うと決めたのなら邪魔立てはしないが、私自身は毒にも薬にもならないので、漁船に乗ってチナに戻り報告するつもりだ。戦うべきだと考える者は戦えばよろしい」と言った。これについて様々な意見が戦わされたが、船旅をやめようという者まで出てきた。司令官は我々の船にやってきて、林鳳についての情報は嘘だろうと言い、もし、他の連中が旅を続けたくないと言うのであれば、彼が我々全員を自分の船に乗せて諸島に送り届けると言った。我々は彼に感謝しつつも、情報を得ようと努めた。我々が懸念したのは、「スペイン人が林鳳と和平を結び、連合しない限り、あれだけの船数でもって脱出するのは不可能である」と公言する者がいて、そのために諸島に来ることを恐

<sup>225</sup> ロアルカは、対処法について意見の相違があったとするだけだが、メンドーサは王とシンサイが戦闘を主張したとする。

れる者が出てきていることだった {+ 彼らは最終的に漁師の情報は嘘であり、彼らの言うようにパンガシナンを脱出することなどありえないと自らを納得させた}。しかし {だから}、司令官はこれ以上穿鑿するのを禁じ、漁師と接触しないよう命じた。かくして数日後、我々はタカオに立ち寄らずに直航することになった。10月11日の深夜に澎湖を出て、*quenio* {*Guenio*}<sup>226</sup> と呼ばれる小島群の近くで朝を迎え、南南東に針路をとった。晩には強風が吹き、2隻が船団を離れたが、うち1隻は王望高の船で修道士とミゲル・デ・ルアルカが乗り、もう1隻は小船であった。しかし、5、6日後にはルソン島に着き、マニラで全船勢ぞろいした {ある船は10月28日に<sup>227</sup>、別の船は11月1日に着いた、そして最も遅く着いたのは司令官 *Siaohya-xiaguac*<sup>228</sup> の船だった。彼らはリマホンの逃亡が本当だったと知って大層憤った。しかし、のちの彼らの言動から察するに、海賊の逃亡は彼らにとってさほどの苦痛ではなかったようである。もし、彼が殺されれば、彼らの任務も終了になってしまうからで、彼らはいましばし任務が継続することを望んでいたのである}。

\* \* \*

以上、見てきたように、サン・アグスティンとパリ本は終盤で大きく異なる。しかも、パリ本のほうが詳細だからと言って、これを単純にテキストの繁本・簡本という関係で説明することはできない。パリ本に見られない記述がサン・アグスティンにあるからである。前半の内容がほぼ同じ（再度言うが、文章は同じではない）であるから、明らかに親縁関係にはあるのだが、かと言って祖本が同じだとするには違いがありす

<sup>226</sup>『南中国』は澎湖諸島の外側の島群としている (p.258)。ロアルカの言う *ymo* にあたるか。ロアルカはこの後「大きな島」*tanguatzua* (メンドーサの *Tangarruan*) に言及し、林鳳が2年間ここに住んでいたとするが、メンドーサはそのことに触れない。パリ本は最初に林鳳の経歴を述べるところで *Takao* 島に1年半いたとしている。矢沢 (p.384) はタンガルアンを60レグア(メンドーサによる。ロアルカは40レグア) というのは過少だが、台湾を指すのだろうとする。おそらく正しい。ただ、湯論文に見たように、林鳳は澎湖、台湾間をせわしなく移動しており、定着したわけではない。

<sup>227</sup> ロアルカ、メンドーサによれば、これは神父たちとロアルカが乗った船である。

<sup>228</sup> サン・アグスティンでは、ここではじめて *Siaoya* の名前が出てくる。『南中国』はその名前を比定できないとしている (p.258) が、前述したように邵岳である。注59 *Dictionary of Ming Biography 1368-1644, vol.2* のラーダの項 (執筆 Antonio S. Rosso), p.1134 は邵岳が2通りに転写 (後者が福建方言) されたとする

ざる。両者の関係についてはいろいろな可能性は考えられるが、すべて推測の域を出るものではない。

確実に我々の前に現前しているのは、福州到着以後で両者が大きく異なるということである。なぜそうなのかも不明と言うしかないが、サン・アグスティンの形でも十分にラーダの中国行の大概は尽くされてはいる。一行は福州という大都市にスペイン人としてはじめて滞在し（ポルトガル人でも、ここに登場する囚人以外は踏み入れたことがない）、副王（巡撫）という高官と折衝し、北京の宮廷との交渉の可能性がほの見える一幕もあったのだから、福州滞在こそが使節行のハイライトであるとも言えるのだが、結果的には福州では何も達せられていない。もともと、使節行のきっかけとなった王望高も泉州から派遣された人間であり、フィリピン政庁に送られた書簡も名目上は巡撫が差出人に名を連ねているが、実質的には「泉州の長官」（興泉道）の書簡と言うべきであろう。また、スペイン人の関心は布教にもあったが、それ以上に交易にもあった。そうであれば、折衝の相手はマニラに來航する中国商人の大半の出航地である漳州・泉州であり、またスペイン人に与えられる可能性があったと述べられる場所も漳州の海上にあった。そうした意味では、使節行の実質は泉州の段階で完結しているのである（ロアルカと異なり、サン・アグスティン・パリ本が泉州の宴席を詳細に記しているのを想起されたい）。サン・アグスティンのテキストが福州以後について詳しくないのには、あるいはそうした関心のありよう（それはラーダ自身の関心の変化によるのかもしれないし、サン・アグスティンが使った写本の作り手のものだったかもしれない）が反映しているのかもしれない。しかし、この点についてはこれ以上云々しても意味がなからう。

問題は、結果としてのテキストの違いである。その中でもかなりのウェイトを占めるのが、福州でようやく登場してくる Siaoya の存在である。彼はロアルカやメンドーサにも出てきて、帰島する海上でスペイン人一行と会話も交わしているが、それでも影が薄い。中国人側の主役は道中あちこちに登場する王望高であり、シンサイである。しかし、パリ本ではこの影の薄い人物の経歴が紹介される。曰く「もと海賊で、帰順した後は日本に使節として赴いたことがある人物である」と。

この Siaoya はすでに陳荊和によって『明実録』の記述により邵岳に同定されているが、

史料は他にも存在する。倭寇研究の書でもある『籌海図編』巻9「平倭録」には、嘉靖三十五（1556）年正月条に、倭寇の巨魁王直の義子毛冽が帰順するための手土産として「徐海（やはり倭寇の巨魁である）が襲来するとの情報」を、「商伴夏正・童華・邵岳」を通じて総督胡宗憲のもとに送ったところ、彼らはそのまま胡の手元に通事として留められたとする。また、同書巻5「浙江倭変紀」同年五月の「桐郷囲解」の項に、やはり倭寇の巨魁陳東が桐郷を包囲する危機に対して胡宗憲が調略を使ってきりぬけようとした時、おりよく陳可願が「王直の義子毛烈、通事童華、夏正、朱尚礼、邵岳ら」の帰順の報をもたらしたので、胡は喜んで童華らを呼び寄せた、とする記事がある。両者は多少食い違っているが、邵岳が王直の義子（前者の記事によれば、前年に蔣洲・陳可願らが日本に向かい、王直を招諭した際に、王直の命で一行を本拠地の五島に招き、その後陳可願と中国に戻った人物）の影響下にある人物で、通事として起用されるほど、日本事情に通じていたことが分かる。

また、その後のこととして、万表の『海寇議』<sup>229</sup>に、徐海滅亡により孤立した王直のもとに胡宗憲が「邵岳・童華らを往来遊説せしむ」とあり、これは決め手とはならなかったが、結局、王直は嘉靖三十六年十一月に帰順した。そして、嘉靖三十九年に兵部尚書楊博が王直捕獲の関係者の論功を題請（『本兵疏議』巻4「会議浙直総督都御史胡宗憲計獲逆寇王直陞賞疏」）する中で、童華・蔣洲・陳可願らとともに納級指揮として邵岳の名が挙げられ、彼は「冒險誘賊」の功績が評価されて、副千戸に昇格している<sup>230</sup>。

これらの記事を見る限り、パリ本にあった「帰順後、日本に使節として向かった」ことは確かめられない。日本への使者派遣と言え、上掲の蔣洲・陳可願の派遣や『日本一鑑』の著者鄭舜功の派遣が知られているくらいで、この記述の信憑性には疑問符がつくが、邵岳が日本に行っていたこと自体は間違いない。「平倭録」に「商伴」とあるのを見れば、王直とのかかわりについては不明ながら、林鳳とシンサイの関係に似たところがある。

彼が浙江から来るのをまって一行は福州を発ったとするパリ本の記述と、陳荆和が

<sup>229</sup> 本書については、山崎岳「舶主王直功罪考（前編）—『海寇議』とその周辺」（『東方学報』（京都）85, pp.443-477）を参照。

<sup>230</sup> 『籌海図編』巻9「平倭録」では、「正千戸」とする。

が引いた『明実録』万暦三年十一月庚戌条で、「遊兵名色把総邵岳」がこの年五月に海壇外洋での倭寇捕獲に功績を挙げたとする記事はかみあわず、ラーダに誤解があるのは明らかだが、邵岳が長年倭寇とかがりあってきた人物であることは確かである。しかし、林鳳の船団とのニアミスに「撃つべし」といきりたつ王望高とシンサイをしり目に、ひたすらスペイン人送還を自らの使命と心得て、肝腎の林鳳討伐には関心を示さない「総司令官」はやはり影が薄いままではある。マニラについた一行が何をしていたのかを語る史料もなく、管見の限りでは帰朝の翌年の万暦五年（1577）四月に浙江で倭寇退治に加わった「昌国把総邵岳」を見出すにとどまり<sup>231</sup>、彼の帰朝が福建の海賊対策にどのような影響を及ぼしたのか知るべくもない。

しかし、彼こそが送還船団の指揮官であったことは、王望高やシンサイと同格の把総であったとはいえ、けっきょくその意見が通ったところからも明らかである。また、使節団の随伴者王望高とシンサイのコンビのうち、スペイン人の記述でも前者が主だが（章題に彼の名前が使われることはあっても、シンサイの名は使われない）、メンドーサには見えないサルセドと林鳳のパンガシナンでの交渉におけるシンサイの役割、彼が少なくとも王望高並みの評価を当局から受けていたとする記述を見れば、王とシンサイの間には実質的な差異はほとんどなく、漢文史料には登場しないシンサイ（王望高はかすかながら登場する）こそがこの使節行の狂言回しであるとも言える。邵岳やシンサイのような商人・通事の働きに注目するならば、サン・アグスティンやメンドーサの記述の「欠落」は些細なこととは言えない。

次に、パリ本、サン・アグスティンとロアルカ、メンドーサの比較についてまとめておこう。

後半大きく異なるとはいえ、パリ本とサン・アグスティンはともにラーダの記述がもとになっているには違いなく、両者は親縁関係にあり、書き手の異なるロアルカのそれとはかなりの相違を示している。旅程の日時からして両者にはズレがある（メンドーサではさらにズレてゆくが、基づくところが別にあったというより、多分に彼の意改ないしケアレミスによるものと疑われる）が、今それはおくとして、道中の描写、兵士たちの夜間の単独行動や、芝居に対する強い関心等、ロアルカにはラーダに見ら

<sup>231</sup>『海防纂要』巻10「金蘭外洋之捷」。

れない記述が相当あり、それがメンドーサにも踏襲されているわけである。福州以後についてサン・アグスティンより充実しているパリ本と比較しても、ポルトガル人捕虜の話や海賊の襲来の話など重なり合う記述もあるが、パリ本にない記述もままある。そのうち1つだけを取り上げるならば、跪拝礼に対する神父と兵士の態度の違いである。妥協やむなしとする神父に対して、ロアルカからは使節がこのような屈辱を受けるのは耐えられないと抗議を行った。それは通らなかったとはいえ、この使節団内部におけるひそやかな対立を仄見させる。神父たちが狙っていたのは布教のための現地残留であり、そのためなら多少のことは我慢する用意があっただろうが、正使でない兵士たちこそがスペインの体面を保とうとしたのである。

サン・アグスティンに見える一行に与えられた指示の中には、ロアルカらに対しては、中国人を刺激するような行動は慎むこと、神父たちの残留がなかった場合には彼らの記録を持ち帰ることしか述べられていない。ラーダらには報告が義務として課されているのに、ロアルカらにはメッセンジャーとしての役目しか期待されていないように見える。しかし、実際にはロアルカは記述を残した。それはラーダと構成を同じくし、ボクサーが言うように両者は相互に参照し合った可能性もあるが<sup>232</sup>、結局のところ、異なるテキストを残したのである。それはロアルカ自身の知的関心がしからしめたものともみられるが、ルビエスが発見したロアルカのテキストの1つが新長官サンデに献呈されているところからして、旧長官ラベサレスにあらかじめ作成を命じられていた可能性が高い。神父のボディガードの役目のほかに、彼とサルミエントにはスパイとしての仕事が課されていた、あるいは自発的にそれを遂行したとみられる<sup>233</sup>。ロアルカの報告に都市の防衛に関する記述が多いのもうなずけるところである。その記述は

<sup>232</sup>『南中国』 p.lxxxix. しかし、残されたテキストから判断する限り、両者の間で記述の調整はされていない。

<sup>233</sup>この後、長官に無断で中国渡航を敢行したフランシスコ会士一行に随行した兵士フランシスコ・ドゥエニャスが広東について残した報告にも、結果としてはロアルカのようなスパイの視線を見て取ることができる。Francisco de Dueñas, “Relacion de algunas cosas particulares que vimos y entendimos en el reyno de China especial dela ciudad de Canton y de otras particulares de que el padre fray Agustin de Tordesillas que en la relacion atras da cuenta mas larga de toda nuestra jornada no se quiso ocupar por ser cosas ajenas a su profesion hecha por mi el alferrez Francisco de Dueñas” (王立歴史学士院所蔵)

メンドーサにも踏襲されるが、後者の「饒舌」は、結果としてスパイとしての視線を弛緩させている。

また、メンドーサはロアルカの情報をできるだけ取り込もうとする一方で、カットした部分もある。前掲のサルセドと林鳳の交渉、そして福建当局との間で交わされた書簡がその最たるものである。メンドーサの目的は中国事情を欧州の読者に提供することにあるだから、結局いずれも実を結ばなかった2つの交渉に関する材料をカットしたのも彼の関心からすれば当然とも言えるが、その結果これらの史料は多くの読者の視野の外に置かれることになった。書簡の価値自体はあくとして、これも立場を異にするテキストが生んだ違いである。

### おわりに—もう1つのテキスト

実は、この使節行について、従来ほとんど注意されてこなかったもう1つのテキストが存在する<sup>234</sup>。それを紹介して本稿を閉じよう。インディアス総文書館に所蔵されるもので (AGI Filipinas, 79, N.15)、写本の表題は“Relacion verdadera de la China”で、一見すると、旅行記と事物誌の2部構成で、章分けされているところや表題からしても、ロアルカのテキストとの近似性を予想させるが、実際には別のテキストであり、パリ本とも異なる (以下、セビーリャ本とする)。全30葉 (表・裏) からなるが、途中で筆跡が2回変わっており、29葉以後は字が消えている部分が多く解読不能、末尾もはっきりしないので、作者や原本の作成時点もわからなければ、いつごろの写本なのかもわからない<sup>235</sup>。1人称で語られるが、作者が誰かを確定することもできない。ここでは、

<sup>234</sup> スペインの文書館サイト Portal de archivos españoles に写真が掲載されていることからして、この史料に注目した人は当然いるはずだが、このテキストを取り上げた論著は今のところ見当たらない ([http://pares.mcu.es/ParesBusquedas/servlets/Control\\_servlet?accion=4&txt\\_accion\\_origen=2&txt\\_id\\_desc\\_ud=424528](http://pares.mcu.es/ParesBusquedas/servlets/Control_servlet?accion=4&txt_accion_origen=2&txt_id_desc_ud=424528))。Pedro Torres y Lanzas ed., *Catálogo de los documentos relativos a las Islas Filipinas existente en el Archivo de Indias de Sevilla, vol.2*, Barcelona: Compañía General de Tabacos de Filipinas, 1926, p.112 の文書番号 2855 に、“Relación sobre las entradas que hicieron los Religiosos de Filipinas, ataque del cosario Limahóng”として載る。

<sup>235</sup> 前注のカタログは、第1葉にテキストとは違う筆跡で「アロンソ・サンチェスが中国事情に関してもたらした報告」と書かれていることを指摘する。これを信じるなら、フィリピンのスペイン人の代表として1586年に本国に向かったイエズス会士アロンソ・サンチェスがもたらし



第1部のみを取り上げることにする。

冒頭（章題を欠く）でマルコ・ポーロに言及するところはラーダに似る。ついで、スペイン人が来島する中国人を通じて蓄積した情報はポルトガル人のそれより勝っているものの、何せ伝聞によるために信憑性が疑われていたが、ラーダら6人（「2人の神父と4人のスペイン人」としてクエンカ、トリアナも主要人物としている）が福建で得た情報と「他の16省<sup>236</sup>について書物で得られた」情報によってこれまでの情報が確証されたとする。次に、アウグスティノ会の大陸挑戦の前史について述べる。布教に積極的だったのはメキシコの管区長とレガスピだったが、当初修道士を連れて行ってくれる中国商人を見つけられなかった。やがて *canco* という名の商人と話がつき、当時の管区長であったラーダによりアルブルケケとオルテガが指名されたが、渡航は実現しなかった（1573年）。そこでラーダは翌年メキシコ副王マルティン・エンリケスとメキシコ管区長ファン・アドリアーノに手紙を書いて働きかけ、これに応じた副王がレガスピの死後長官になっていたラベサレスに手紙を書いて渡航への協力を求め、管区長もアルブルケケとアロンソ・デ・アルバラードの渡航を認めた。しかし、またしても商人に断られた。商人がしり込みするのは、国禁に触れるからである。そこで、アルブルケケはミンドロ島にやってくる商人に依頼して承諾を得るが、彼は翌年フィリピンに戻ってこなかった。失望していたところに思わぬ形で今回の渡航が実現したとする。パリ本やロアルカに述べる前史<sup>237</sup>よりはかなり詳しい。

## 第2章「大暴君・海賊リマホンのマニラ来襲」(ff.2r-4r)

ここの叙述もパリ本やロアルカとは違っているが、どちらかと言えばロアルカに近い<sup>238</sup>。述べられる内容に大差はないが、特徴として挙げうるのは、ラベサレスのクローズアップである。彼の「信じがたいまでの、かつ迅速な配慮」(*con yncreyble y prestissima diligencia*) が危難を救ったとして、他のテキストがひとしなみにサルセド

---

たもの、ということになる。

<sup>236</sup> 15省が正しい。

<sup>237</sup> ロアルカは、第1章で会士の渡航企図についてごく短く触れた後、すぐに林鳳の話題に転じる。

<sup>238</sup> 林鳳の出身地に触れず、林道乾にも言及せず、福建当局が派遣した船を200隻以上とし（ロアルカは130隻）、林鳳の退避場所を *tango* とする。しかし、林鳳がマニラに向かうきっかけとなったジャンク拿捕を数隻とし、上陸地点をマニラから1レグアの地とし、パンガシナンとマニラの距離を40レグアとするなど、ロアルカとの一致を見せることが多い。

の救援が第2次攻撃前に間に合ったことの意義を強調するのに対して、こちらは「たとえサルセドが来なくとも、われらが神はその慈悲と長官の勇気によって賊徒からフィリピンを救っただろう」としている。作成者がラベサレスに近い人物であることを推測させるに足る。

第3章「王望高<sup>239</sup>が yncuanto すなわち泉州 (Chinchin) の長官によってリマホンの動向を探るべく派遣されたこと」(ff.4r-5v)

ロアルカの第3章に相当し、表題も似通う<sup>240</sup>。パンガシナンでの攻防戦について「委細を述べることは私の意図ではないので省略」とするとあるところを見ると、これに1章を費やしたロアルカとは関心が違うことになる。ここで、他にない記述を挙げれば、①王望高の頭巾、靴の描写、②彼がラベサレスの前で平身低頭の姿勢を取ったこと、③マニラに12～15日滞在したこと<sup>241</sup>、④ラベサレスが彼に「これまでチナ人を保護してきたのも、チナ王との友好関係を結びたいがためであり、宣教師派遣もその一環であり、任務さえなければ私が渡航したいくらいだ」と言ったこと、などである。ここでも、ラベサレスがフォーカスされているのが分かるだろう。

第4章「チナにパードレ・フライ・マルティン・デ・ラーダとパードレ・フライ・ヘロニモ・マリンが2人の兵士とともに派遣されることになり、長官ガイド・ラベサレスから彼らに良き指示が与えられる」(ff.5v-8r)

管区会議で2人の派遣が決まったことをまず述べ、ついでサルミエントとロアルカが紹介される。ラベサレスの指示が箇条書きで述べられるのは、サン・アグスティンと同じである。また、末尾には発令日を6月12日とする<sup>242</sup>。次に「長官が書いた手紙の翻訳を併載するのがふさわしく思われる」として「ルソン島のカピタン bassar<sup>243</sup>が福州 (huccheo) の軍門 (comun) と福建のインクアントに、王への転送のために書い

<sup>239</sup>ここでは homonco となっているが、homoncon となっているところもあり、表記が一定しない。

<sup>240</sup>「泉州の長官による派遣」がロアルカにはない。ロアルカの第2章はパンガシナン攻防を扱うが、セビーリャ本ではこれが省略されたために、ここで足並みがそろうことになった。

<sup>241</sup>前述のように、ロアルカの記述が正しければ、王望高のマニラ到着は4月8日である。この記事と組み合わせると、マニラには約2週間滞在し、その後パンガシナンに戻ったことになる。

<sup>242</sup>サン・アグスティンが6月2日としているのは誤ったものだろう。

<sup>243</sup>前掲注121の王望高の長官宛書簡の漢訳のように、ラベサレスの名前を漢字に直した後、再変換したものである。

た手紙」<sup>244</sup>を転写する。すでにサン・アグスティンとロアルカでは内容がかなり違うのを見たが、これはロアルカと文章がほぼ同じである。しかし、ロアルカに引用されていた王望高の書簡はない。航海の記述はロアルカに近いが、中国人の航海術の拙劣については触れない。最初に到達した場所を *tituhul* と表記するのは、メンドーサと同じである。港の光景の描写のついでに、福建には400隻もの「王の大船」を有するが、建造・維持のコストがかかっていないから不思議とするに足りないコメントしている。

第5章「湾に入った際の出来事」(ff.8r-9v)

ロアルカの第5章とタイトルも似ていれば、述べる内容も重なり合う。ただ前述したように(注131)、ロアルカの記述には混乱があって理解しにくいのに対して、こちらは実にすっきりしている。つまり、シンサイの身柄の確保をめぐる争いを2つの異なる所轄 (*dos distintas gobernaciones*) 間のもものと明記しているのである。漳州と泉州の争いと見た矢沢の見解はここに支持されるのだが、船を送ったのは彼が言うように漳州知府ではなく、海道 (*aiton gobernador*) と明示されている<sup>245</sup>。ロアルカと異なる解釈を示しているメンドーサが見たテキストはこのセビーリャ本に近いものだった可能性も考えられる<sup>246</sup>。

第6章「王望高の船が到着し、神父たちが中左所<sup>247</sup>に上陸し、そこで起きた出来事」(ff.9v-11v)

一行を出迎えたのが、「港のカピタンまたはコレヒドールと泉州の長官が派した3人の軍官」とするのはロアルカに近い(注134)。この軍官のうち1人が滞在期間中随行し続けたとするのは、その名前こそ挙げないが、ラーダと同じである。上陸した神父に輿、馬が提供されたのにこれを断ったとするのも、ラーダと同じ。この日の宴席の描写はロアルカより詳しい<sup>248</sup>。翌日訪問してきた官人を「船40隻の司令官」とし、そ

<sup>244</sup> 単に「王への手紙」としているサン・アグスティンやラーダより、手紙の実態に沿ったタイトルである。

<sup>245</sup> 海道を漳州の長官とする記述があることは、すでにみたとおりである。

<sup>246</sup> ただし、一行到着の3日前に通報があったとするのはロアルカと同じで、メンドーサ(10日)とは異なる。メンドーサの単純な誤りか。

<sup>247</sup> これも文中では *tiosusu*, *tioncocu*, *hocucu* と表記が一定しない。

<sup>248</sup> コレヒドールが神父たちに鄭重な礼を取ったことを記す。

の一行を詳しく描写する点や中左所の軍（1000）・民（4000）の数はロアルカと同じだが（注134）、叙述の順序は異なる<sup>249</sup>。

第7章「神父とスペイン人たちが中左所を出発し、地元民が oticuan と呼ぶ同安（tengoa）に向かう」（ff.11v-13v）

実際には泉州入りまで記すので、章題と中身がマッチしていない。また、Oticuan が同安の別名のように見えるが、ロアルカが「彼らが県（coan）と呼ぶ同安」「県の長官を Ticoan と呼ぶ」とする県・知県を混同したものである<sup>250</sup>。道中の描写はロアルカと同じく詳しいが、さらに、遠隔の地に種々の畑を作る理性ある人々を生ぜしめた神の叡慮に驚嘆してみせ、人獣・物資の密度はスペイン、フランドル、フランスの首都を訪問した人でもこれほどなのは見たことがないと言うだろうなどと述べる<sup>251</sup>のは、他に見えない。同安の人口を1万とするのはロアルカに同じである（注144）。町の描写は具体的で、ロアルカらが訪れた遊樂の家への言及もあるが、彼らが夜歩きたとは述べられておらず、ご婦人方とのささやかな接触にも言及がない。

本章の途中、ちょうど筆跡が変わる13葉表以後は、ロアルカと多少の異同はあるがほぼ同じ文章である<sup>252</sup>。2部についても同様である。サン・アグスティンとパリ本の前半は内容がほぼ同じといっても、文章は違っていた。しかし、こちらは文章も同じである<sup>253</sup>。これ以後はロアルカによって補われたとみるべきだろう。したがって、この後に出てくる修道士と「我々」の区別は、セビーリャ本前半の作者確定の手立てにはならない。冒頭でアウグスティノ会の大陸チャレンジについてパリ本以上に詳しく語ること、福建で見た自然と人為の奏でる豊かさに神の叡慮を見て取っていること、「夜遊び」を一人称でなく、客観的に「遊樂の家」に言及するところを見れば、両修道士の

<sup>249</sup> ロアルカは章の冒頭で人口に言及するが、セビーリャ本は章の終わりである。しかも、「これらの数は信じられず、実際には20000以上いるのではないか」としている。

<sup>250</sup> タイトルだけでなく、本文中でも誤っている。

<sup>251</sup> ラーダは、パリで学問を積んでいる。

<sup>252</sup> ただし、ロアルカの第11章にあたる部分を全く欠くなど、時に欠落はある。

<sup>253</sup> 唯一見るべき違いは、ロアルカ、メンドーサに出てくる Plon 島、一行がフィリピンに戻る際に挙げられた細かな地名のかなりが Peou となっていることである。あらためて、ロアルカとメンドーサを読み比べると、メンドーサがそれらの地名が独立したもののよう描写しているものの、ロアルカにはそう書いていないことに気付く。メンドーサによる意改が疑われる。

いずれかが作者であろうとの推測が成り立つが、決め手はない<sup>254</sup>。多少、ロアルカとメンドーサの落差を埋めるような記述も見られるが、これで諸テキストの関係が明らかになるわけでもない。

ただ、このセビーリャ本も含めて、ラーダの中国行関連のテキストが種々あるなかで、あらためて、メンドーサ（英<sup>255</sup>・日・漢語でも読める）、そしてボクサーが英訳に取り上げたサン・アグスティンのテキストに「西洋人の中国観を表す著述」としての特権的地位が与えられていることを思わないわけにはいかない。メンドーサがマテオ・リッチの記録が刊行される以前あるいは以後でさえも大きな影響力を持ったことを考えれば、それが不当であると言うつもりはない。しかし、メンドーサのよりどころとなったテキストの産生の場に即して考えると、やはりそこには一種の偏向があると思う。

ラーダの中国行は、布教・交易という2つの目的はいずれも達成できなかったが、中国情報を手土産に帰島することができた。しかし、当時の状況を考えれば、これは僥倖と言わざるを得ない。まず、フィリピン—中国間の航海の困難がある。ラーダがボリナオから中左所に入港したという事実1つとっても、当たり前のことではない。目的地にたどり着くこと自体当時珍しかったのは、この後のフランシスコ会、ドミニコ会、そしてイエズス会の有名なアロンソ・サンチェスの渡航<sup>256</sup>を見れば分かるが、ほとんどが目的地を外して漂着しているのである。他会士の場合は加えて大陸で生命の危険にさらされた体験を多く持つ（ただし、フランシスコ会にしてもドミニコ会に

<sup>254</sup> ラーダは注27の1576.5.1書簡で、現長官サンデと前長官ラベサレスを比較して、布教活動に対する熱意において後者が勝っていることを述べ、更迭後冷や飯を食っていた彼の功績に報いるよう王に訴えていて、文書のラベサレス称賛と平仄は合う。ただ、ラーダ自身（あるいは同行したマリン）が上述したような同安に関する混同をすることは考えにくい。ラーダの口述をマリンが記録したように、他の同胞が作成した際に間違った可能性も考えられる。

<sup>255</sup> ただし、ハクルート叢書本の注は寥々たるもので、あらためて本格的な注解本がつくられるべきであろう。その点では現代スペイン語版も同様で、Biblioteca de Viajeros Hispánicos シリーズに収録されたもの（Madrid: Miraguano Ediciones, 1990）も、メンドーサ第1部のソースであるエスカランテ、そしてメンデス・ピントとともに *Viajes y crónicas de China en los Siglos de Oro* (Córdoba: Almuzara, 2009) に収録されたもの（第1部のみ）も簡単な注しかついておらず、今なおもっとも充実しているのは、クルスの日笠の初訳・改訳版に寄せた序文でいずれも「反響の薄さ」をかこっている矢沢による訳注である。

<sup>256</sup> Manel Ollé, *Empresa de China*, Barcelona: El Acantilado, 2002, 平山篤子『スペイン帝国と中華帝国の邂逅—十六・十七世紀のマニラ』（法政大学出版局、2012）第2章参照。

しても数々のチャレンジの末に1630年代に中国内地に入り込むことに成功する)のに対し、後輩が続くのに1世紀以上を閲したこのアウグスティノ会士の渡航は、長官の使節、共通の敵の存在という恵まれた条件下において、儀礼上のトラブルや倭寇との通謀を疑われる一幕があり、帰島時には林鳳とのニアミスに肝を冷やしたものの、結果的にはおおむね平穩無事と評してよかろう。また、メンドーサはその文彩によってラーダや他会士の中国行をリーダブルな読み物に仕上げることに成功した。ラーダの渡航記の傍らには辛酸をなめたフランシスコ会の航海記も並んでいるのだが、そのテキストからは現場の緊張感などは失われている。

そうした当時の、あるいは現代の読者の視点を離れてみると、ラーダの中国行が大きな緊張感の中で行われたことに気づかされる。そのきっかけとなった林鳳のマニラ襲撃は、その後のフィリピンにおけるスペイン人の命運を左右する出来事であった<sup>257</sup>(さらに、その後確立するガレオン交易の意義を考えれば、このローカルな事件は世界史の道筋を変える可能性をはらんでいた)。豊臣秀吉の恫喝、華人虐殺を招いた動乱も、これほどの危機ではない。当時のスペイン人にとって、「リマホン襲来」がいかに脅威であったかは、それを書き記すスペイン人の証言が相当数残っていることが示している。

同時に、様々な謎もまた残されている。林鳳襲来からパンガシナン遠征にいたる4か月の間にスペイン人の体制立て直しがいかに進められたのか(現地民の一部が海賊に呼応する状況から一転して遠征に友軍を動員できたのはなぜか)、一方、林鳳は2度とマニラ襲撃を試みずにパンガシナンで小王国を築くことで何を目指していたのか、ラーダらを送り届けた邵岳ら一行は半年の間マニラで何をしていたのか(この時は、かなりの数の兵がラーダの泉州・福州滞在期間より長く居座っていたにもかかわらず、彼らのもたらした情報は史料に反映されていない。ここにはロアルカはいなかったのである)等々。これらの謎は今後も解き明かされることはないだろう。

しかし、ここで取り上げたテキストの差異や、メンドーサが基本的にはロアルカの

<sup>257</sup> 林鳳の襲撃を初等教育の課本として取り上げた Juan Caro y Mora, *Ataque de Li-Ma-Hong á Manila en 1574*, Manila が1897年に刊行されているのは象徴的である。ここではサルセドが「救国の英雄」として描き出されている。

記述の枠組みを踏襲しながらその一方でそぎ落とした部分を、サン・アグスティン（地の記述の部分）を媒介にして見直すことで、ラーダの中国行が実現した場のありように注意が向けられれば、本稿の目的は達せられたことになる。

